

福井工業高等専門学校

研 究 紀 要

人文・社会科学

第 55 号

RESEARCH REPORTS OF NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY (KOSEN),
FUKUI COLLEGE
THE HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCE NO.55

FEBRUARY 2022

目 次

福井高専による地域貢献・地域活性化 —本校の一教員として共同研究に関わるには— ……………	<u>古 谷 昌 大</u> ……	1
学級経営・教科指導における Microsoft Teams の効果的 活用法について—担任クラスにおける実践報告— ……………	<u>森 貞</u> ……	13
高専におけるグローバル人材育成についての一考察 —英語教育の視点から— ……………	<u>宮 本 友 紀</u> ……	35
高専の社会科科目における合意形成力の涵養 —裁判員制度への理解の深化を目指した合意形成 ゲームの実践— ……………	<u>川 畑 弥 生</u> ……	43

* 下線は投稿者

CONTENTS

Regional Contribution and Activation by NIT, Fukui College: How Do We Work on Collaboration as a Faculty Member of NIT, Fukui College?	<u>Masahiro FURUTANI</u>	1
Effective Use of Microsoft Teams for Class Management and Subject Teaching —A Practical Report of the Class under My Charge—	<u>Sadashi MORI</u>	13
The Meaning of “Developing Global Human Resources” in the context of Kosen —Perspectives from EFL Teachers—	<u>Yuki MIYAMOTO</u>	35
Fostering Consensus-Building Abilities in the Social Studies Curriculum of National Institute of Technology (KOSEN) —A Consensus-Building Game to Deepen Student Understanding of the Saiban-in System—	<u>Yayoi Kawabata</u>	43

*The name of an underline means a contributor.

福井高専による地域貢献・地域活性化 —本校の一教員として共同研究に関わるには—

古谷 昌大*¹

Regional Contribution and Activation by NIT, Fukui College: How Do We Work on Collaboration as a Faculty Member of NIT, Fukui College?

Masahiro FURUTANI

To discuss collaboration activities with companies and/or research institutions, two important words, “regional contribution” and “regional activation”, were defined at the front of this article. In the earlier part, approaches of NIT, Fukui College to regional community (Fukui prefecture) were classified into total six categories. Collaboration and technical support were then featured and discussed which would belong to a category of regional contribution producing intellectual property. Furthermore, for collaboration activities, special areas of the research of NIT, Fukui College were found out, by investigating each founding background of research institutions in Fukui prefecture including NIT, Fukui College. In the latter part of this article, some interviews were conducted to learn the circumstances and attitudes when we, faculty members of NIT, Fukui College, are working on collaboration and technical support. The real situation was looked back, resulting in making a proposal on the attitude for members of NIT, Fukui College including myself.

Keywords : regional contribution, regional activation, regional community, collaboration, technical support

1. はじめに

研究者、特に工学系の研究者は、自身の研究成果が何らかの形で世の中の役に立つことを望んでいるのではないだろうか。筆者もまた工学系の一研究者であり、地域貢献・地域活性化に携わりたいとの思いを持って福井高専に着任した。しかし、何をもって地域貢献・地域活性化と言えるのかということ (Goal、図 1(1))、また、本校教員が地域貢献・地域活性化の一つ一つの Goal に対してどのように関わっていけば良いのかということ (Approach、同図(2)) について曖昧なままでは、その思いは空回りしてしまう。そこで本論文では、現在筆者が所属している本校物質工学科 (旧工業化学科) を軸に、「地域貢献・地域活性化の Goal および Approach」について、これまでの本校の実績を振り返りながら整理、考察してみたい。さらに、県内の他の理工系大学・研究機関とは異なる、本校ならではの地域貢献・地域活性化とはどのようなものか、ということについても考えてみたい (同図(3))。本論文では、福井大学、福井県立大学および福井工業大学の 3 大学を比較対象とする。また、

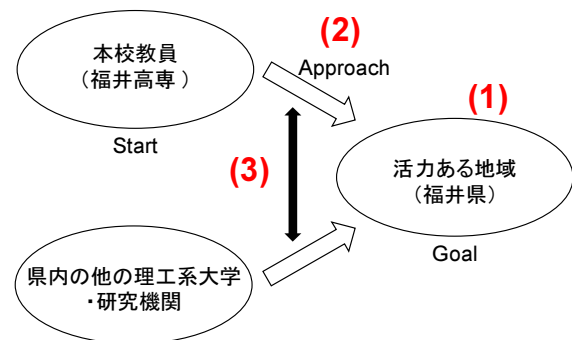


図 1 本論文において考察する、地域貢献・地域活性化に関わっていくために明確化するべき事項。(1) これまでの本校の実績や活力ある地域の具体像、(2) (1)に対するアプローチ、(3) 県内の他の理工系大学・研究機関のアプローチとの違い。

公設研究機関である県工業技術センターも比較対象に加える。

本論文の前半では、本校が為し得る様々な Goal について概説する。後半においては、そのうちの一つである共同研究に考察対象を絞って議論を進める。本校の共同研究としてどのような領域の研究が特色となるのか、また、一高専教員としてどのような姿勢で共同研究に関わっていくべき

*物質工学科 ¹furutani@fukui-nct.ac.jp

かということについて考える。

2. 地域貢献・地域活性化という Goal の分類

本論文では、「地域貢献」および「地域活性化」という言葉を次のように定義して使い分ける。

「地域貢献」…地域からの要望に応え、改善・具現化すること（ニーズへの対応）。

「地域活性化」…地域に対して、新しく概念を提供すること（シーズの発信）。

ともに地域と高専の関わり合いの中から生まれるものであるが、「地域貢献」は地域に高専が応じ、一方「地域活性化」は高専に地域が応じるものであるとする。

地域貢献、地域活性化はともに「地域に財を成す事業」である。財の種類としては、知的財産（知財）にとどまることなく、主に教育の結果としての人的な財産（人財）¹⁾も考えられる。そこで本校の年史などを参考に、地域貢献および地域活性化の Goal について知財と人財で分類を行なった^{2,3)}。その結果、表 1 のように全 6 分類に整理された。以下に、各分類について簡単に説明する。

【分類Ⅰ：知財を成す地域貢献】「共同研究（企業主導）」は、企業が本校に持ちかけて行なわれる基礎または応用研究である。「県産官学連携事業（産官主導）」は、企業や県が本校に持ちかけて行なわれる基礎または応用研究である。「技術相談」は、本校の地域連携テクノセンターが行なっている企業などからの相談受付、およびその対応である。「受託研究」は、企業などから委託を受けた研究を、本校が代行するものである。

【分類Ⅱ：知財を成す地域活性化】「共同研究（高専主導）」は、本校が企業に持ちかけて行なう基礎または応用研究で

ある。「県産官学連携事業（高専主導）」は、本校が産業界や県を先導するかたちで行なう基礎または応用研究である。

「各種交流会、JOINT フォーラム」は、本校発の最新研究成果を、企業関係者などを対象に学会形式で公開することである。「研究成果のプレスリリース」は、本校での最新研究成果の一般公開である。

【分類Ⅲ：知財と人財を同時に成す地域貢献】「プロジェクト演習」は、企業が持つ課題を本校における教育素材としてとらえ、企業と本校が一体となって取り組む課題解決手段である。

【分類Ⅳ：知財と人財を同時に成す地域活性化】「アントレプレナーサポート」は、本校の地域連携センターが行なっている起業者支援である。

【分類Ⅴ：人財を成す地域貢献】「技術講習（高度技術者研修）」は、本校が所有する研究設備を利用して、企業研究者の研究技術を養成するものである。「卒業生の輩出（高専教育）」は、本校で質の高い教育を受けた卒業生が、地域企業や公的機関で活躍することである。「オープンカレッジ、公開講座、高専カフェ」は、本校の施設を一般開放し、知的好奇心を満たしてもらう場である。「出前授業」は、本校教員が地域施設（小中学校など）に出向き、実験を主とする特別授業を通して理科への理解を深めてもらう場である。

【分類Ⅵ：人財を成す地域活性化】「高専主催各種コンテスト」は、本校が企画し、一般からの自由なアイデアを審査、表彰することで、地域住民の科学的な活動を鼓舞するものである。「学生主体の地域交流」は、本校が企画、または地域の催しに参加することで、地域の生活環境や文化的情緒を醸成するものである。「学生の各種大会での活躍」は、本校の学生が出場した大会やコンクールで好成績を取

表 1 本校が関与し得る地域貢献・地域活性化（Goal）の分類。

	地域貢献 (ニーズへの対応)	地域活性化 (シーズの発信)
知財	・共同研究(企業主導) ・県産官学連携事業(産官主導) ・技術相談 ・受託研究 [分類Ⅰ]	・共同研究(高専主導) ・県産官学連携事業(高専主導) ・各種交流会, JOINTフォーラム ・研究成果のプレスリリース[分類Ⅱ]
知財+人財	・プロジェクト演習 [分類Ⅲ]	・アントレプレナーサポート [分類Ⅳ]
人財	・技術講習(高度技術者研修) ・卒業生の輩出(高専教育) ・オープンカレッジ, 公開講座, 高専カフェ ・出前授業 [分類Ⅴ]	・高専主催各種コンテスト ・学生主体の地域交流 ・学生の各種大会での活躍 [分類Ⅵ]

めることで、地域住民に高揚感を与えるものである。

以上、表1に挙げたGoalの項目がすべてであるということではない。表の中にはないGoalを新たに創造していくことも重要であることは言うまでもない。

3. 本校の共同研究への Approach

本節以降では、分類ⅠとⅡに跨る共同研究に焦点を当て、その具体的な Approach について考察を進める。まず、本校設立当時の地域社会情勢について整理する。そこから、本校が地域から当初期待されたことについて考える。次に、県内の他の理工系大学・研究機関の沿革・動向について、産学連携関連も含めて整理する。本校の地域連携テクノセンターの活動や共同研究の実績とも比較しながら、本校が今後どの領域でどのように共同研究を行えば特色あるものとなるのか、ということについて考えてみたい。

3・1 本校設立時の地域社会情勢

本校が設立された1965年(昭和40年)当時、県内の高校生徒数は増加の一途をたどっており、前年には高校全入・すしづめ学級解消などを訴える街頭署名運動も行なわれている⁴⁾。経済状況としてはなべ底不況を脱し、東京オリンピックを経て景気回復へと向かっていく時期(いざなぎ景気)と重なる。県内における高等教育機関の拡充が進み、さらに県としては従来の農業立県から工業立県への脱皮を図っていた⁵⁾。本校の開校と同年に福井工業大学が開学している⁶⁾。また、福井大学では工学研究科修士課程が設置され、産業機械工学科の増設が行なわれている⁷⁾。

本校開校時の学科は機械工学科、電気工学科および工業化学科の3学科である。これらの学科に託された地域貢献の領域の一つとして、原子力産業が考えられる。表2は、本校設立前後における県内の原子力発電事業関連の動向をまとめたものである⁴⁾。原子炉をめぐる誘致運動と反対運動が繰り返されるなか、県としては嶺南地方を中心に誘致に舵が切れつつあった。本校開校後は県内の原子炉が相次いで臨界に達し、世間一般にも原子力発電が認知されていった。初代校長・内藤敏夫先生ならびに第2代校長・木村毅一先生が、いずれも原子力をご専門とされていたこと、また、地域連携テクノセンターの前身が原子核工学基

表2 本校設立前後における、県内の原子力発電事業関連動向。

年	出来事
1957(昭32) 1960(昭35)	県原子力懇談会発足 研究用原子炉誘致運動始まる (反対運動も同時に始まる)
1962(昭37)	日本原電、敦賀と美浜の原子炉建設候補地を発表 敦賀市議会、原子力発電所誘致を決議 関西電力、美浜の原子炉建設候補地を日本原電より譲渡
1965(昭40) 1967(昭42)	福井高専開校 動力炉・核燃料開発事業団設立
1969(昭44) 1970(昭45)	日本原電敦賀1号臨界 関西電力美浜1号臨界、大阪万博会場へ試験送電

表3 本校設立前後における、県内の繊維産業関連動向。

年	出来事
1955(昭30)	繊維工場設備近代化資金6か年計画を発表(県)
1962(昭37) 1965(昭40)	鯖江染色工業団地着工 福井高専開校 鯖江染色工業団地の建設計画縮小・再建を決定
1966(昭41)	鯖江染色工業団地の再建計画を発表(県) 福井県繊維雑貨特産展を香港で開催(国内繊維産地からの初の見本市)
1969(昭44) 1970(昭45) 1979(昭54)	日米繊維交渉始まる 鯖江染色工業団地完成 県の繊維を特定産地・業種指定(産地振興法、通産省)

礎実験施設(資料館付設)であったことなどからも、本校の『原子力』産業への貢献がそのまま地域貢献になると考えられていたことが推察される^{8,9)}。しかし一方で、本校物質工学科の前身である工業化学科に設けられた科目の中に、原子力産業に直接関連する名称のものは見受けられない。

では、本校工業化学科が設置に至った経緯はどう説明されるのか。当時の状況を整理する。機械工学科および電気工学科の設置はすぐに決まり、最後に決まったのが工業化学科であった。これは、県の産業事情から繊維産業に関係する学科の設立に対する要望が強かったが、当時の政府の方針として機械工学、電気工学、工業化学および土木工学の4学科の範囲内での設置が計画されており、地元が希望

する「繊維工学科」との摺合せが纏れたことによる⁸⁾。したがって、『繊維』産業への貢献がもう一つの地域貢献として考えられていたことが推測される。このことは、当時の世話役である福井大学長・藤野清久先生が、新設工業化学科の教員の一人として繊維化学をご専門とされる栗野志夫先生を採用されたことから伺うことができる⁸⁾。

主に地域士族による製糸、織工、養蚕業などの振興に端を発し、明治以降県内の繊維産業は大いに発展してきた⁴⁾。羽二重に代表される絹織物や人絹織物がその中心であったが、第2次世界大戦後は合成繊維の生産に転換が図られる¹⁰⁾。それに合わせて、県内の繊維産業関連工場の設備も計画的に近代化が進められていった(表3)⁴⁾¹⁰⁾。本校設立前、中心となって合成繊維関連の研究・調査を進めていたのは県工業試験場(県工業技術センターの前身)と福井工業専門学校(福井大学工学部の前身)であった¹⁰⁾。そのような状況のなか、1960年代初頭、繊維産業における重要工程の一つである「染色」をその名に冠する染色工業団地の建設計画が鯖江市に持ちあがった¹⁰⁾。鯖江市は当初、同団地に染色関係の大学を設置する計画であったが実現せず、これが福井高専誘致につながるとされる⁵⁾。実際、工業化学科には「繊維化学」、「色染化学」、「高分子化学」などの繊維産業に配慮した科目が複数設けられた¹¹⁾。その後染色工業団地は縮小の憂き目に遭いながらも再建され、1970年には完成を見る。度々の不況や日米貿易摩擦問題(いわゆる、日米繊維戦争)を乗り越え、県の繊維産業は逞しく成長していった。以上のような経緯を踏まえると、本校物質工学科の今後の共同研究を考えるうえで、『繊維』は重要な領域の一つとなり得る。県の基幹産業を下支えするという意味でも、受け継いでいかなければならないと考える。

3・2 県内の他の理工系大学・研究機関と福井高専

県内には、本校以外の主な研究機関として福井大学、福井県立大学、福井工業大学および県工業技術センターがあり、設立時期とその由来は様々である(表4)^{6,7,10,12,13)}。

福井大学は教育系と工学系が合わさるかたちで、福井高専開校の16年前に大学として発足した⁷⁾。発足当時の工学部には建築・紡織・繊維染料の各学科が設けられ、1959年(昭和34年)には学部附属の繊維工業研究所も設置された。

その後の度重なる再編によって学科名から繊維関連の名称は消えてしまったが、2019年(平成31年)4月には繊維・マテリアル研究センターが設置され、現在もなお発足当初の研究領域である繊維産業を重要視していることがうかがえる。なお、2021年(令和3年)現在の同大学工学部は5学科で構成され、そのうちの一つの物質・生命化学科の研究・教育内容が本校物質工学科のそれに近い。

福井県立大学は農学を通じた地域農業への貢献がその設立の根底にある¹²⁾。短期大学として開学した際には、農学科、経営学科および看護学科が設けられた。4年制大学となつてからは経営学部と生物資源学部の2学部制となり、現在では海洋生物資源学部および看護福祉学部も加わった。主に県の農林水産業への貢献を意識した学部編成であると言える。本校物質工学科では現在「材料工学コース」と「生物工学コース」の2コース制を設けているが、後者のコースは近年目覚ましい発展を遂げてきているバイオテクノロジーに対応すべく設置されたものである²⁾。現代の農林水産業においてバイオテクノロジーは切り離せないものとなっており、この『バイオ』の領域において本校と福井県立大学は今後互いに切磋琢磨することになると考えられる。

福井工業大学の前身は電気系の夜間学校で、開学時には電気工学科と機械工学科が設けられた⁹⁾。設立目的として、原子力産業への貢献が念頭にあったと推察される。現在は3学部8学科で構成され、環境情報学部環境食品応用化学

表4 福井県内における理工系大学・研究機関の設立状況：●福井大学、▲県工業技術センター、■福井県立大学、□福井工業大学にそれぞれ関連する事項。

年	出来事
1873(明6)	●福井師範学校創立
1902(明35)	▲県工業試験場設立
1920(大9)	■県農業試験場内に 県農業技術員養成課程設置
1923(大12)	●福井高等工業学校創立
1938(昭13)	●福井青年師範学校創立
1944(昭19)	●福井高等工業学校が 福井工業専門学校に改称
1949(昭24)	●福井大学発足 □北陸電気学校創設
1965(昭40)	福井高専開校 ●大学院修士課程設置 □福井工業大学開学
1975(昭50)	■福井県立短期大学開学
1985(昭60)	▲県工業技術センター発足
1992(平4)	■福井県立大学開学

科があるが、その系譜を辿ると応用物理学科に行きつく。同学科では化学・生物学に基づく環境や食品、バイオテクノロジーに関する研究が幅広く展開されているが、原子力産業に関連した内容に限られたものではないようである。

これらの理工系大学の他に、県内はもとより全国的に見ても最古の工業研究施設として県工業技術センターがある。前身は県工業試験場であり、繊維の研究を行なうために設立された^{10,13)}。その後、窯業試験場（1947年（昭和22年）設立）、工芸指導所（1952年（昭和27年））、土木工事材料試験所（1965年（昭和40年）設立）、およびデザインセンターふくい（2016年（平成28年））が加わり、県の繊維産業や伝統/地場産業に関する多様な技術相談・指導を展開している。

前述の通り本校の当初の設立目的は、県内の原子力や繊維に関連した産業発展に寄与することであったと考えられる。その役割としては、福井大学、福井工業大学および県工業技術センターが同じ領域で研究機関として“並走”するなかで、それらの産業に必要な人材育成、すなわち、技術者教育に力点が置かれていたのではないかと推察する。開校当初の本校は、研究機関というよりは教育機関として地域社会に認識されていたのではないだろうか。

3・3 福井高専地域連携テクノセンター

原子核工学基礎実験施設の発展的改組として、先進技術教育研究センターが設置されたのは1991年（平成3年）のことである。同センターの設置は、科学技術の著しい発展と高学歴社会の到来という当時の社会状況のなかで、県民や地元企業に高度教育研究やリフレッシュ教育の場を提供することを念頭に置いていた⁹⁾。そして、2005年（平成17年）には地域連携テクノセンターと改称された。この年は国立高専機構の独立行政法人化の翌年であり、高専運営の自由度が増したことを受け、地域連携活動の重点化が図られた¹⁴⁾。地域と能動的に関わっていかうとする高専側の意思がここから読み取れる。2021年（令和3年）11月現在、組織としては7つの研究部門（「地域・文化」「環境・生態」「素材・加工」「計測・制御」「エネルギー」「安全・防災」「情報・通信」）から構成されており、技術相談や共同研究、受託研究などの窓口となっている³⁾。

現在の地域連携テクノセンターの施設としては、地域支援室、デジタル造形室、高度分析計測室、およびアントレプレナーサポートセンターがある³⁾。このうち地域支援室は、本校の共同研究に『原子力』、『繊維』および『バイオ』の各領域とは別の新たな研究領域と特色を付与し得る。同施設は、丹南地区の伝統/地場産業である眼鏡枠、越前和紙、越前漆器、越前打ち刃物、越前焼きなどに対する技術支援を念頭に、2004年（平成16年）伝統産業支援室として先進技術教育研究センター内に開設されたものである。丹南地区に立地する本校は、多彩な『伝統/地場』産業の企業とも共同研究などを通じて関与する体制を既に持っており、今後これを活かさない手はないと考える。

3・4 県内における産学共同意識の芽ばえ

県工業技術センターのように、主に地元企業と積極的に共同研究を行なおうとする姿勢が、1990年（平成2年）過ぎ頃から県内の各大学においても見られるようになった。表5は、各大学および本校の関連センター開設の状況について、時系列に並べたものである^{6,7,12)}。福井大学の地域共同研究センター設置にやや遅れて、福井工業大学と本校が相次いで同様のセンターを設置している。各大学においては最近組織を刷新しており（福井県立大学は新設）、産学連携や地域連携をいっそう強化する傾向にある。

ここで強調すべきことは、本校が他の大学に混じって同様のセンターを立ち上げているということである。これらの組織はそもそも、機関本体が研究活動を行なっていることを前提として設置されるものである。当初は人材育成・

表5 県内教育研究機関の共同研究センター設置状況：●福井大学、■福井県立大学、□福井工業大学にそれぞれ関連する事項。

年	出来事
1992(平4)	●地域共同研究センター設置
2002(平14)	□産学共同研究センター設置
2005(平17)	●地域連携テクノセンター設置
	●産学官連携推進機構設置
2006(平18)	●地域貢献推進センター設置
2007(平19)	●産学官連携本部設置
2015(平27)	□地域連携研究推進センター設置
2017(平29)	●産学官連携・地域イノベーション推進機構設置
	■地域推進本部開設

技術者教育のための「教育機関」として認知されていたかもしれない本校が、この頃になると「研究機関」としての“顔”も持ち始めていたと考えられる。

なお近年では、県主導とも言える産・学・官・金の連携が加速している。2015年（平成27年）、県（公益財団法人ふくい産業支援センター）と県工業技術センターが中心となり、ふくいオープンイノベーション推進機構（Fukui Open Innovation Promotion Agency, FOIP）が設立された¹⁵⁾。県内の企業と大学、研究機関、金融機関の連携が図られ、本校も参加している。2020年（令和2年）には20年先を見据えた「福井県長期ビジョン」が策定され、新産業創出を目指した活動が活発に行なわれている。

3・5 本校の共同研究の特色とは

ここまでの調査で浮かび上がってきた『原子力』、『繊維』、『バイオ』および『伝統/地場』の4領域の他に、どのような研究領域が共同研究を行なううえでの本校の強みとなり得るか。それらについてさらに探っていくために、これまでの本校における共同研究の内容の整理・分析を行なった。図2は、共同研究の各研究題目について、重複を許しつつキーワードで分類し、その累積数の推移を表したものである。たとえば、研究題目が「反応性スパッタによる窒化チタンコート眼鏡枠への応用について」（後述）であれば、『材料』、『表面/界面』および『伝統/地場』の各領域に関連するとして重複カウントしている。調査の結果、新たに8つの研究領域—『土木/防災』、『材料』、『デバイス』、『システム』、『環境』、『表面/界面』、『機械』および『教育』—が浮かび上がった。同図より、これらのうち『バイオ』関連の共同研究が最多であった。これに『土木/防災』、『デバイス』および『材料』に関連する共同研究が続いた。この中で『デバイス』関連の共同研究は、2014年度（平成26年度）までは本校の“お家芸”的位置付けにあり、今後においても件数増加が期待される。めっきや表面加工など『表面/界面』関連の研究も多く見受けられ、『繊維』産業や『伝統/地場』産業との繋がりが示唆された。『システム』や『環境』に関連した共同研究は、学科を問わず参加できる研究領域である。また、『教育』に関する共同研究は、高専ならではの印象を受ける。『伝統/地場産業』、『機械』および『繊維』

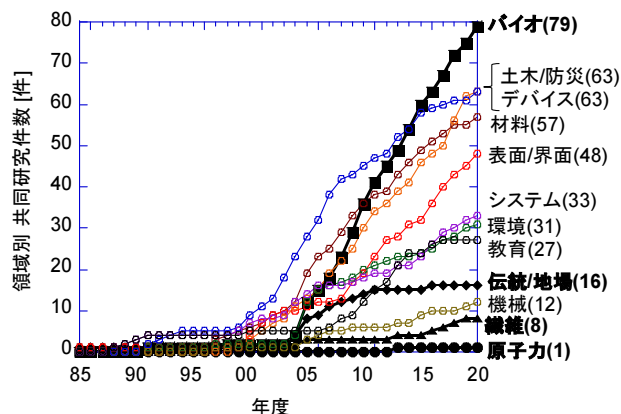


図2 1985～2020年度（昭和60～令和2年度）における本校の共同研究の研究領域による分類と累積数の推移。

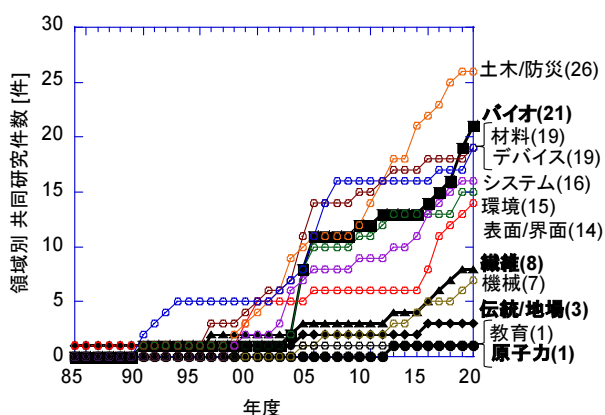


図3 1985～2020年度（昭和60～令和2年度）における本校の県内企業との共同研究の研究領域による分類と累積数の推移。

関連の共同研究件数は、緩やかな増加傾向にある。『原子力』に関係すると考えられるものは、現状1件（2013年度（平成25年度）研究題目：キトサン練り込み糸を用いた紐状接触材のセシウム吸着効果、物質工学科 高山勝己先生、支援センター 片岡裕一先生）のみであった。

図3には、県内企業との共同研究に絞って同様の調査を行なった結果を示す。近年においては『土木/防災』、『バイオ』、『システム』、『表面/界面』、『繊維』および『機械』といった研究領域で、県内企業との共同研究が特に盛んであることがうかがえる。これ以外の研究領域においても、県内企業のニーズに積極対応していく、またはシーズを提供していくことにより、本校は依然として強みを発揮できると考える。なお、筆者が属する本校物質工学科は、化学と生物学を教育・研究する学科であり、上記12個の研究領域すべてに、様々なかたちで関与できる。

以上、本校が共同研究を行なう際に強みとなり得る研究

領域について述べてきたが、いずれの領域も本校の独壇場ではなく、県内（外）の他の理工系大学・研究機関と肩を並べて、共同研究を進めていかなければならない。このような状況下で本校の特色を出していくにはどうすればよいのであろうか。本論文では3つ提案したい。まず1つ目として、**他の理工系大学・研究機関とともに共同研究に参加し、補完的役割を担う**ということである。すなわち、痒いところを掻く“まごの手”のような存在を目指すということである。他の研究機関にはない特別な装置の導入、あるいは柔軟な考え方ができる高専生の共同研究への参加などによって、その共同研究において存在感を示せると考えられる。2つ目に、**ニッチな領域を開拓する**ということである。これは、高専教員個人の見方・捉え方に依るところが大きい。共同研究におけるニーズに対して多角的にアプローチする能力や問題発見能力を磨くことが、そのまま特色ある共同研究に繋がっていくと考える。さらに3つ目として、**本校の他学科・一般科目教室と連携しながら学際的に共同研究を行なう**ことを提案したい。本校は他の理工系大学・研究機関に比べ小さい組織であり、それゆえ互いに連携しやすい状態にある。多角的な視点として共同研究に活かすことができれば、高専ならではの特色になり得ると考える。

4. 一高専教員としての共同研究への Approach

本節では、共同研究を行なううえで高専教員としてどんな制約が現状存在し、それを考慮したうえでどのような姿勢で臨んでいくべきか、ということについて考える。

4・1 共同研究のかたち

図4は、本校の共同研究件数とそれに関わった教員の数の推移を表したものである^{29,16)}。記録として残る共同研究では、1985年度（昭和60年度）に電気工学科の柴田明先生と石山眼鏡株式会社の間で行なわれたもの（研究題目：反応性スパッタによる窒化チタンコート眼鏡棒への応用について）が最も古い⁹⁾。本校初の共同研究が『伝統/地場』産業に関わるものであったということは、本校の立地条件が活かされているという点で非常に興味深い。1988～1991年度（昭和63～平成3年度）にかけては、第4代校長・丹

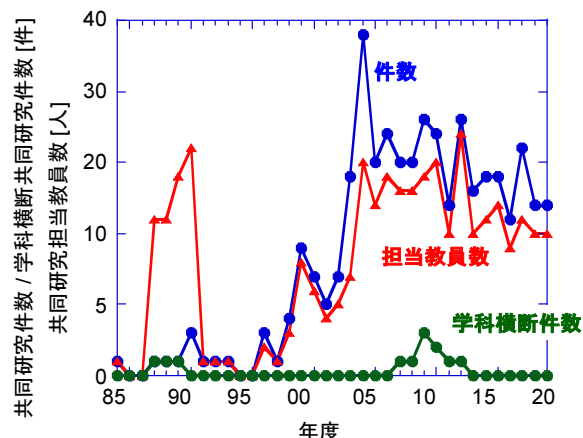


図4 1985～2020年度（昭和60～令和2年度）における本校の共同研究件数（青色、学科横断で行なったものは緑色）および担当教員数（赤色）の推移。

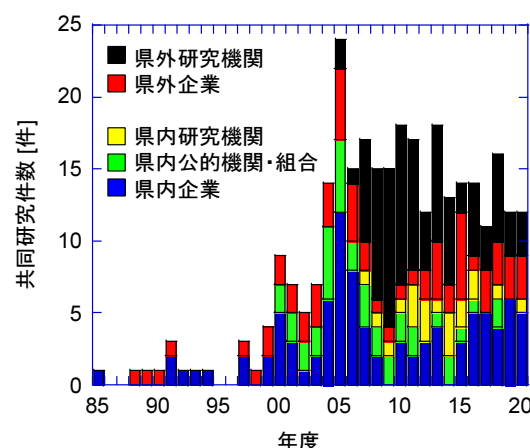


図5 1985～2020年度（昭和60～令和2年度）における本校の共同研究先の推移。

羽義次先生を筆頭に共通科目教室（当時）、一般科目教室、総合情報処理センター（当時）および当時の全学科（機械工学科、電気工学科、工業化学科、電子情報工学科および土木工学科）の代表教員が協同して、富士通株式会社との共同研究（研究題目：工業高等専門学校における電算機システムの最適化に関する研究）を行なっている。以降、1999年（平成11年）までは年5件未満で推移しており、本校の共同研究の黎明期として位置付けられる。2000年度（平成12年度）には、共同研究件数が倍増している。これは同年度に初めて企画されたJOINTフォーラムによって、本校と企業の繋がりが強化されたためであると考えられる。共同研究件数が最多を記録したのは2005年度（平成17年度）である（24件）。これは、先進技術教育研究センターから地域連携テクノセンターに改称された時期とちょうど重なる。また、前年度には伝統産業支援室が設置されており、注目

度が一気に高まったためであると考えられる。

共同研究に関わる教員の数は、共同研究件数を基本的に下回っている。これは、共同研究1件に対して教員1名で対応しているということ、および特定の教員が複数の共同研究を受け入れている実態を反映していると考えられる。一方で、複数学科の教員が協同で1つの共同研究を受け入れた例は少ない。2010年度（平成22年度）の計3件がピークであり、環境都市工学科－物質工学科間、機械工学科－物質工学科間、および電気電子工学科－電子情報工学科－環境都市工学科間での協同事例に限られる。

次に、共同研究先の内訳について図5に示す。2000年度（平成12年度）から県内公的機関・組合（県産業振興財団、県産業支援センター、県和紙工業組合、鯖江商工会議所、県建設技術公社など）が、2005年度（平成17年度）から県外研究機関（豊橋技術科学大学、長岡技術科学大学など）が、2007年度（平成19年度）から県内研究機関（若狭湾エネルギー研究センター、福井大学）がそれぞれ加わっている。2006年度（平成18年度）以降は年間15件前後の共同研究件数で推移しているが、県内企業との共同研究件数は変動している。本校の直接的な地域貢献・地域活性化という意味では、2015年度（平成27年度）からの増加傾向を維持しつつ、総件数を底上げしていくことが望まれる。

図6には、本校のこれまでの共同研究について、その件数と受入金額の内訳を示す。近年においては、県外研究機関との共同研究が特に盛んであることが読み取れる。また、県内企業との共同研究について、1件当たりの受入金額は県外企業との共同研究に比べ小さい傾向にあることがわかる。これは、本校が県内企業の共同研究を受け入れる際の“敷居が低い”ことを示しており、肯定的に捉えることができる。この受け入れ環境を今後も維持し、受入金額は伸びなくとも県内企業との共同研究件数を増やしていくことが大事であると筆者は考える。

4・2 共同研究のきっかけは技術相談

技術相談件数は共同研究件数に連動するように、1994年度（平成6年度）の90件から2007年度（平成19年度）の795件までは概ね右肩上がりに伸びている（図7）^{2,9,16}。その後急減しているが、理由としては3つ考えられる。1つ目

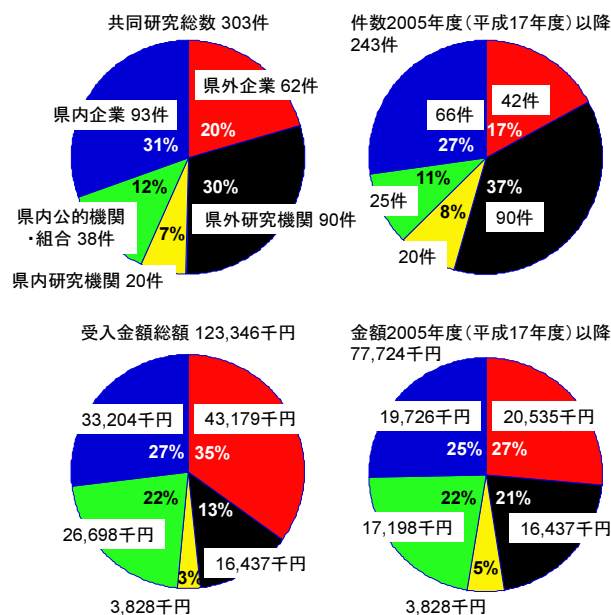


図6（左側）本校の共同研究先の総数および受入金額総額の内訳。（右側）2005年度（平成17年度）以降に限った場合の共同研究先総数と受入金額総額の内訳。

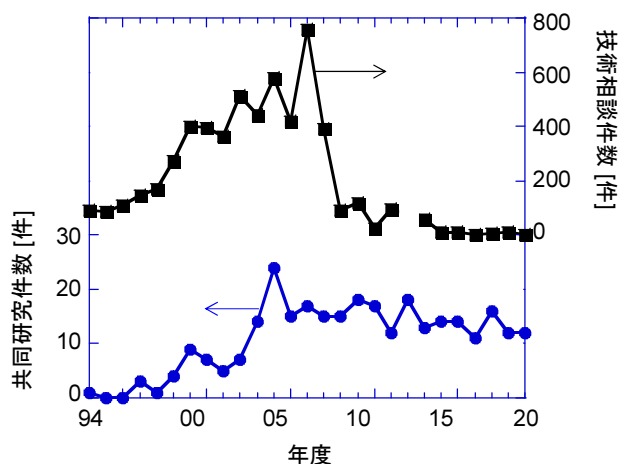


図7 1994～2020年度（平成6～令和2年度）における本校の共同研究件数（青色）および技術相談件数（黒色）の推移。2013年度（平成25年度）の技術相談件数のデータなし。

は、県内の他大学において地域連携を強化する動きがあり、企業の相談先が分散したということである。2つ目は、本校の集計方法の変更である。事実、2008年度（平成20年度）までは各教員に相談件数のみを申告してもらう簡易的なものであった。3つ目としては、高専機構によって2008年3月に制定された「技術相談運営要領」が影響しているかもしれない。同要領は2012年（平成24年）12月に改正され、これにより各高専は技術相談料を徴収できるようになった。地域連携テクノセンターによる正式な件数把握は、2015年度（平成27年度）から行なわれている。

以上のことを考慮すると、センターを介した「公式の」

技術相談は、最近5年間（2016～2020年度（平成28～令和2年度））では11件、1件、7件、11件、3件と推移している（“綱渡り”感は否めないが0件にはなっていない）。「非公式の」ものも含めると年間数十件～100件程度の相談が寄せられているのではないかと推察される。技術相談は、[分類Ⅰ：知財を成す地域貢献]の中では最も実施しやすいと考えられる。本校の地域連携テクノセンターが窓口となり、初回の相談料は無料である。企業は気軽に相談を持ちかけることができ、高専教員としても気負わず相談を聞くことができる。そして、技術相談をきっかけとしてその企業との関係を深めていくと、その後共同研究に発展する場合もある。学校組織として現状の相談環境を維持・改善していくとともに、積極的に広報していくことが求められる。

時には“敷居の低さ”ゆえに、分野違いの相談が持ち込まれることもあるという。その教員の専門や研究領域を把握したうえで相談があれば、科学者・研究者という大きな括りで見られての相談もある。企業の相談内容と教員の研究領域の関係性は、図8のように場合分けされる。同図(a)や(b)のように、企業の相談内容が教員の研究領域の範囲内である場合、あるいは重なる部分がある場合については、双方に掛かる負担は少ないまま円滑に共同研究に発展していく可能性は高い。教員が持つ研究シーズに企業側が関心を示す場合も、これらの場合に当てはまる。一方、同図(c)のように接点があるのみの場合では、教員側は共同研究化を敬遠することになるかもしれない。たとえば、有機・高分子材料が専門である筆者に対して低分子化合物の合成手法や無機材料開発の相談が持ち掛けられた場合、同じ化学の分野とはいえ自信を持って対応することは難しい。同図(d)のように教員の研究領域から全く外れる（たとえば、筆者に対して耐震建築の相談をされる）ことになればなおさらである。しかし、技術相談が同図(a)や(b)の場合に該当することは確率的には小さく、同図(c)や(d)のような相談で訪れる企業に対して消極的な態度を取り続けるとすれば、なかなか共同研究に関わることはできない。本校の先輩教員の方々に共同研究を行なううえでの心構えについて伺ったところ、自分の研究領域に拘って受け身の姿勢であってはいけない、とのことであった。“その企業のために何か役に立てないか”と真摯に、謙虚に耳を傾け、自分から積極的

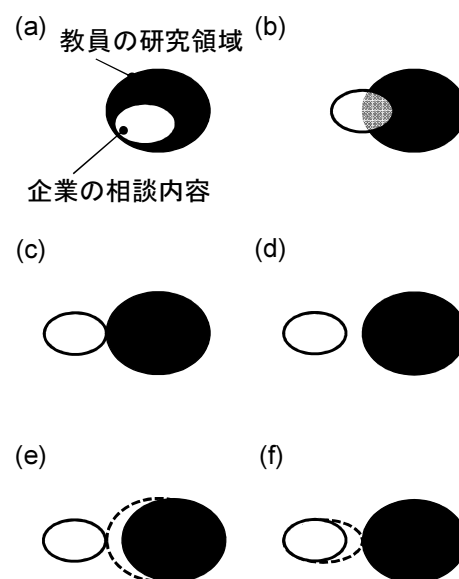


図8 企業の相談内容（白丸）と教員の研究領域（黒丸）の関係性（両者の重なり部分は灰色）：企業の相談内容が教員の研究領域に対して(a)範囲内にある、(b)重なっている、(c)接点がある、(d)離れている、(e)、(f)最初離れた状態から接点を持たせる。

(A) 教育に関する業務	_____ %
(a-1) 授業および成績評価	_____ %
(a-2) 学級運営, 進路指導(担任)	_____ %
(a-3) 就職先開拓	_____ %
(a-4) 部活動指導, 引率	_____ %
(B) 研究に関する業務	_____ %
(b-1) 研究活動(学生指導を含む)	_____ %
(b-2☆) 共同研究(, 技術相談)	_____ %
(b-3) 学会, 執筆活動	_____ %
(C) 組織運営に関する業務	_____ %
(c-1) 学科運営	_____ %
(c-2) 各種講習会などへの参加	_____ %
(c-3) 広報活動	_____ %
(c-4) 学校行事, 委員会活動	_____ %
(c-5) 学生寮の宿日直	_____ %
(D) 私生活	_____ %

図9 高専教員の業務（(A)～(C)）の分類と整理のためのリスト。**太字**は、大学教員時に負担をほぼ感じなかった項目。

に関わろうとする姿勢が大事である、とのことである。すなわち、同図(e)のように、自分の研究領域を拡大する機会と捉える姿勢を可能な限り取ることが大事であると考えられる。そのうえで、的確な対応が困難であると判断した場合は、教員自身が一教員（あるいは一研究者）としてこれまでに築いてきた校内外の人脈を活かし、適任者を紹介するという「触媒」の役割も重要である、とのことであった。その

時点では自身の共同研究に至らなくても、相互理解が進んで信頼も深まり、次回以降の技術相談がしやすくなると考えられる。同図(f)のように、やり取りの中で自身の研究領域に対する企業側の理解が深まれば、それに関連した相談を持ち掛けてくる場合も生じる可能性がある。共同研究や技術相談に限ることではないが、人脈は活用・維持・発展させるべきものである。

4・3 共同研究の進行

共同研究の成果を得るために実験や測定を滞りなく行なっていくためには、当然ながら人手が必要である。教員の研究室に配属される本科生や専攻科生の参加・協力が不可欠になるが、特に本科生は研究活動に慣れておらず、教員が丁寧にフォローしていかなければならない。教員独自の研究テーマであれば、ある程度自由にペース配分を決められるが、共同研究となると企業側のスケジュールや求められる成果、納期などが優先して考慮される。したがって、研究のスケジュール管理にいつそう気を配らなければならない。一方で、高専教員には大学教員以上に数多くの業務が課せられている(図9)。同図右側のパーセンテージ(いわゆるエフォート)は、(A) 教育に関する業務、(B) 研究に関する業務、および(C) 組織運営に関する業務の三大業務と、(D) 私生活の合計が100%となるように配分される。すべてに数値を当てはめたとき、共同研究に充てられるパーセンテージが少なくとも上位にこななければ、実りある共同研究にすることができない。そのように考えると、高専教員にとって共同研究は至難の業となることが想像される。しかし、それでも共同研究を行なっていくためにはどうすればよいか。大切なこととして2つ挙げたい。1つ目は、**各項目の遂行の効率化を絶えず考え続ける**ことである。各項目は当然ながら年々充実させていかなければならず、そのためには新しい試みが必要となりパーセンテージ増につながる。そこで、効率化も併せて行なっていく。細かいパーセンテージの増減を繰り返しながら、全体としては減少させていく。2つ目は、**自分の中で優先順位を明確化し、選択と集中を行なっていく**ことである。どの項目を重要と考えるか、また、どの項目を得意とするかということは教員ごとに異なり、一教員の中においても時間・経験とともに

変容していくものである。各項目のパーセンテージの配分の仕方はその教員の個性であり、人生とも言える。「自分はこんな人間だから」と決め付けないこと、また、人生設計を常に念頭に置くことが大事であると考ええる。学校組織側には組織全体のバランスを見つつ各教員の個性に対してある程度寛容であること、および組織全体のバランスを考え適材適所を実践すること、の2点が求められる。

三大業務((A)~(C))以外のパーセンテージ、すなわち(D)私生活についても、教員は大事にするべきである。家族とのコミュニケーションや趣味の時間が教員本人の人間性を豊かにすることは言うまでもなく、それが長期的には高専教員の本分である学生教育に還元されると考える。そのような観点から、教員の業務負担軽減と円滑な業務遂行環境の整備のための組織的な努力は重要であると考ええる。

4・4 共同研究で得られる知財

共同研究の成果については報告書作成の他に、特許や論文、学会発表などによって公表する場合が考えられる。このうち職務発明としての特許出願・権利維持は、本校地域連携センターに在籍する知的財産コーディネーターの協力を得て進められる。先行研究調査や学内審査、高専機構への申請のための期間(数か月)を含め、4~5年で特許成立というのが一般的とのことである。費用面を考慮すると、共同研究先企業の協力が得られる場合は特許化がしやすい。その場合、論文作成や学会発表の時期を調整する必要がある。

高専教員側からすると、一研究者としての成果(特許、論文、学会発表など)を得たいところではあるが、それらはあくまで形式的なものであって、地域貢献や地域活性化の本質ではないと筆者は考える。特に、共同研究先が企業や公的機関である場合、課題が満足できるほどに解決されているかどうか、また、広義の利益(地域社会の物質的・精神的豊かさ)が得られているかどうか、ということについて絶えず確認することが大切であると考ええる。

5. あとがき

本論文では、本校が行なう地域貢献・地域活性化について、知財および人財の観点から分類・整理した。中でも共

同研究に着目し、本校がどの研究領域で、どのように取り組んでいくべきか、ということについて考察した。また、高専教員が共同研究する環境・姿勢について整理し、提言を行なった。筆者同様、今後共同研究を行なってみたくと考えておられる本校教員にとって、少しでも参考になれば幸いである。

あくまでも、共同研究の実施は地域貢献・地域活性化の一つに過ぎない。地域貢献・地域活性化のためにできること・やりたいことは、教員によって異なる。各教員が自分なりの Goal を定め、充実感を持ってそこに向かっていくことが最良であることを最後に記し、あとがきとする。

謝辞

本論文執筆にあたり、取材を快く引き受けてくださった本校教員の皆様、知的財産コーディネーター 蓑輪泰造様、ならびに総務課総務・地域連携係 近藤智裕様に感謝申し上げます（所属名称は、執筆時点のもの）。本論文での調査は、令和 2 年度学校改善事業次世代高専教員育成勉強会プロジェクトの一環として行なわれた。

参考文献

- 1) 谷口功, 『高専教育の未来=教育改革を先導する=』, 平成 31 年 1 月 28 日高専教育シンポジウム～進化する高専教育～(学術総合センター、一橋講堂) 発表スライド(2020 年度新任教員オンライン研修にて視聴)。
- 2) 福井高専 40 周年史編集委員会編, 『爽やかな 40 年の風～福井高専この 10 年のあゆみ 2005～』, 福井工業高等専門学校(平成 17 年), 65, 121-138 頁。
- 3) 『地域連携テクノセンター活動紹介誌 JOINT2020—地域との連携を目指して—』, 福井工業高等専門学校地域連携テクノセンター(令和 2 年), 2-33 頁。
- 4) 福井県編, 『福井県史 年表』, 福井県(平成 10 年), 310-485 頁。
- 5) 福井工業高等専門学校十年史編集委員会編, 『福井工業高等専門学校十年史』, 福井工業高等専門学校(昭和 50 年), 25 頁。
- 6) 金井学園五十年史編集委員会編, 『金井学園五十年史』, 金井学園出版部(平成 11 年), 663-687 頁。
- 7) 福井大学五十年史編集委員会編, 『福井大学五十年史』,

福井大学(平成 14 年), 766-774 頁。

- 8) 田中敬次編, 『福井高専 5 年の歩み』, 福井工業高等専門学校(昭和 44 年), 6, 7, 68, 74, 付録 4 頁。
- 9) 福井工業高等専門学校三十年史編集専門委員会編, 『福井高専三十年史』, 福井工業高等専門学校(平成 7 年), 142, 337 頁。
- 10) 土田誠著, 『織物ふくい戦後史』, 福井新聞社(昭和 60 年), 80-82, 98-108, 147-152 頁。
- 11) 福井工業高等専門学校二十年史編集委員会編, 『福井工業高等専門学校二十年史』, 福井工業高等専門学校(昭和 60 年), 42 頁。
- 12) 記念誌編集委員会編, 『福井県立短期大学の歩み』, 福井県立短期大学(平成 5 年), 325-326 頁。
- 13) 福井県工業技術センターホームページ(<http://www.fklab.fukui.fukui.jp/kougi/kougi/history.html>) より。
- 14) 福井工業高等専門学校 50 周年記念誌専門部会編, 『福井工業高等専門学校 50 年史』, 独立行政法人国立高等専門学校機構福井工業高等専門学校(平成 28 年), 32-33 頁。
- 15) 山本雅己, 『福井県におけるオープンイノベーション戦略の現状と今後』, 令和 2 年 12 月 16 日 JOINT フォーラム 2020 特別講演(鯖江市嚮陽会館), 発表スライド資料。
- 16) 福井工業高等専門学校自己点検・評価委員会編, 『福井工業高等専門学校自己点検・評価報告書』, 独立行政法人国立高等専門学校機構福井工業高等専門学校(平成 22 年～令和 2 年), 該当頁。

(受付日 2021 年 11 月 8 日)

(受理日 2022 年 1 月 21 日)

学級経営・教科指導における Microsoft Teams の効果的活用法について — 担任クラスにおける実践報告—

森 貞*

Effective Use of *Microsoft Teams* for Class Management and Subject Teaching — A Practical Report of the Class under My Charge —

Sadashi MORI

Microsoft Teams (henceforth *Teams*) is a tool for remote group communication and collaboration, so it is well known that it enables teachers and students to give and take classes respectively under a remote circumstance. This paper shows new ways of using *Teams* in class management and in teaching subjects (e.g. English). In the former case, a chat function of *Teams* enables a classroom teacher to edit a collection of students' compositions/essays on school events more easily and more efficiently into a *Word* file format through copying and pasting. In the latter case, a {post/chat} function of *Teams* enables a subject teacher to facilitate students' self-learning through uploading *PowerPoint* files used in classes immediately after the class and online questions and answers between a teacher and a student, respectively.

Keywords: *Microsoft Teams*, class management, teaching English, self-learning, online questions and answers

1. はじめに

福井工業高等専門学校では、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2020年5月7日から8月7日にかけて、*Microsoft Teams* (以降 *Teams*) を用いた遠隔授業が行われた。後期からは、通常の対面授業が再開し、2021年度は年度当初から対面授業が行われている。

この *Teams* は、インターネット接続環境があれば、いつでもどこでも利用できることから、遠隔授業以外にも、利用価値が高い。クラスの学生全員に対してであれば「投稿」を、学生個人に対してであれば、「チャット」を用いて、即座に連絡したい事項を伝えることができるし、「チャット」の添付機能を使えば、*Word*, *PDF* 等の電子データ (スクリーンショットを含む) になっている場合に限られるが、課題を提出させることもできる。

10年ぶりに1年生のクラス担任となった筆者は、上記の利点を踏まえ、学級経営・教科 (英語) 指導に、*Teams* を積極的に活用するように努めた。本稿は、その実践報告である。

本稿の構成は、以下のとおりである。2節では、学級経営における *Teams* 利用の実践例を報告する。3節では、教科 (英語) 指導における *Teams* 利用の実践例を報告する。4節は、まとめである。

2. 学級経営

令和3年4月6日 (入学式当日) に、教務主事・総合情報処理センター長の連名で、「*Microsoft Teams* の利用について」という文書が、新入生および保護者に配布された。本文は以下のとおりである。

高専機構と *Microsoft* 社との包括協定により、本校の学生全員が *Microsoft 365* のアカウントを持っており、これらの機能を利用して学校からの連絡などを行っています。そのため、新入生の皆さんには、これから順次、各種アプリのインストールやセッティングを行って頂くこととなります。*Microsoft Teams* (以下 *Teams*) は *Microsoft 365* のアプリケーションの一つで、授業や教員との連絡、学生間でのコ

*一般科目教室 1mori@fukui-nct.ac.jp

コミュニケーションツールとして使用することができるツールです。そのため、4/7（水）のHRにてスマートフォンでのTeamsのセッティングを行います。（後略）

上記の日程にしたがって、Teamsのセッティングが行われ、4月7日以降、学生のTeams利用が可能になった。

2・1 入学式直後のホームルーム・保護者懇談会

入学式直後に、各教室に移動し、ホームルームを行った。担任・担任補佐の自己紹介の後に、パワーポイントで、「『F3』の意味」（『青武台だより』No.225 掲載原稿（2021/04/01 発行）【付録 1】）を提示し、それを読み上げて、[F3]の意味、[F3]のスローガンを確認するとともに、[F3]のABCを提示した（後日、[F3]の意味・[F3]のABCはF3教室に掲示した）。

その後、連絡事項はTeamsの「投稿」あるいは「チャット」に随時アップロードするので、注意すること（「見逃していた」は言い訳にならない）と作文はTeamsの「チャット」の添付機能を用いて提出してもらうことになることを伝えた。

[F3]の意味

- ①授業、試験、レポート提出に係る学習習慣の基礎づくり
- ②新たな環境に適応した生活習慣の基礎づくり
- ③良好な人間関係構築の基礎づくり

[F3]のスローガン

- 元気（げんき）
- 勇気（ゆうき）
- 根気（こんき）

[F3]のABC

- A-あいさつ（朝・昼・晩）
- B-美化（整理・整頓、清掃の徹底）
- C-Composition（学校行事の感想文）

昼休みをはさんで、午後からは、保護者懇談会を行い、午前中のホームルームで学生に話した内容に加えて、学生の学校生活の様子を作文等で保護者向けに発信するので、それに対する反応（作文を読んだ感想等）をお願いするこ

とがある旨、お伝えした。



2・2 『青樹』巻頭言テスト

「文は人なり」という言葉があるが、担任がどのような人間であるかを理解してもらうために、保護者懇談会の時に、校友会誌『青樹』に掲載された巻頭言【付録 2】【付録 3】を配布した。学生には、4月7日の帰りの会の時に、「よく読んでおくように」とだけ指示し、配布した。

翌8日に、『青樹』巻頭言テスト【付録 4】（解答時間5分）を抜き打ちで実施した。合格点は10点中6点以上であったが、不合格者（5点）は1名だけであった。

〈週末課題〉として、学生には、保護者に「あとで内容に関するテストをしてもらうから」と言って、巻頭言2枚を読んでもらうよう依頼した。さらに、（巻頭言を見ずに）問題を解いてもらった後に、採点をして、月曜日に提出するよう依頼した（不合格者（5点）は1名だけであり、不合格の学生の保護者であった）。

『青樹』巻頭言テストの正解は以下のとおりである。

- 1. ① 2. ② 3. ② 4. ③ 5. ②
- 6. ① 7. ② 8. ① 9. ③ 10. ②

2・3 文集『2021年度F3のASHIATO』

筆者は、クラス担任時には、必ず、学校行事に関する体験文を書かせることにしている。その理由は、体験を文章化することで、自身の行動の良かった点・反省すべき点を認識することができ、その認識を、以降のより良い行動を取るための指針とすることができるかと信じているからである。また、学校行事後に、体験文を書かなくてはならないということになると、いい加減な気持ちでの参加を抑制す

ることにつながるであろうと期待しているからでもある。

今年度の文集は、10月末の時点で、第5号まで発行済みである。原稿は、Teamsの「チャット」の添付機能を用いる形で提出させている。この方法を用いることで、送付されてきたブレインテキスト（あるいはWordファイル）の原稿をコピー&ペーストして、PDF化すれば、即座に、Teamsにアップロードできる状態になり、発行までの時間が、以前担任していた時よりも、大幅に短縮可能となった。また、以前は、必要部数（クラス学生数+関係教員数）を印刷して配布する形を取っていたが、この方式を採用したことで、F3のTeamsの「投稿」に文集をアップロードすることで、学生だけでなく、F3の教科担当にも容易に配布（閲覧）可能となり、労力の大幅な軽減につながった。なお、教務主事・学生主事・寮務主事・学生相談室長・各学科長・一般科目教室主任には、別途メール経由で配信している（F3のチームに紐づけすれば、Teamsからの配信も可能である）。

以下に、第1号から第5号に掲載した作文を抜粋する（作文の再録（掲載）に関しては、関係学生より「掲載許可」を得ている旨、付記する）。

2・3・1 第1号（『新入生オリエンテーション』編）

表紙【付録5】に続いて、学生の作文を掲載して、文集を作成した。以下に学生の作文（4人分）を再録する。

「幸」

新入生オリエンテーションに参加しました。最初は休みの日だった土曜日に学校があり、悲しいなと思っていたけれど、マイクロディベートやドッチボールをクラスの友達と一緒にしていくうちに楽しく感じていくようになりました。

マイクロディベートでは自分は情報不足で役に立てませんでした。しかし、他の方達がすごい情報を集め頑張って票をとっていて、すごいなーと思いました。今度やる時は役に立てるようにしっかり議論することを調べていきたいと思えます。

ドッチボールでは相手のチームを全滅させたりして圧勝していたけど、最期の試合では逆に全滅させられそうになり負けてしまいました。しかし、クラスの人との友好も深

めることができ、「きのこの山」も選ぶことができ、不幸中の幸いだったなと思いました。

今回のオリエンテーションで多くの人と仲良くなったけれど、まだまだ話したことも名前も知らない人がたくさんいるので、これからの学校生活で自分から進んで話しかけたいこうと思いました。そして今回仲良くなれた人とはより仲良くなれるようにしたいです。

「短かった楽しい時間(朝からなのに約2時間)」

僕はオリエンテーションを朝からすると聞いて、ディベートやドッチボールを楽しく、長時間できると思っていました。でも、実際は時間のほとんどを講話の時間が占めていて、とても驚きました。

とても長い講話では、各教科の学習法や単位など制度について聞き、げっそりしたものの、高専の特徴である体験型の授業の話や課外活動の話で夢が膨らみました。とても有意義な時間になったと思います。

クラスワークであるディベート大会では、自分の調べたドラえものひみつ道具の知識と仲間の意見の援護で相手の意見に対抗することができ、ディベートというのはこういうものなんだなと体感することが出来ました。ディベート結果は惨敗という残念な結果に終わってしまいましたが、自分なりに理論を組み立て、最善の戦いをする事ができたので悔しくはありませんでした。

ドッチボール大会では、同じチームの人がとても強くて頼りになりました。1回戦、2回戦はチームに損害なく圧勝できて気持ちよかったです。3回戦目は、なす術なく蹂躪されましたが、チーム全員が笑顔で終わったのでよかったです。

午前中は眠気と戦い、午後はたくさんの人と楽しみました。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいましたが、高専の良い思い出となったのでよかったです。

「SSSSS」

今日は、午前中に5種類の講話がありました。自分の中で新しいことが一杯の高専のシステムを少しずつですが、今回の講話を通じて理解してきました。

まず高専とは、小中高とは異なり学生自身が主体的に自ら行動して自分自身で高め、自立していく場所だと感じま

した。そして体験型の授業で技術・技能を身につけていく場所でもあったと思います。さらに、勉強面だけでなく、挨拶や笑顔も大切にしている学校だと知りました。

最後に、講話を元に5年間の高専の特徴を自分の言葉で5Sにまとめてみます。「自分自身で」の self、「技術・技能」の skill、「挨拶」の salute、「笑顔」の smile、「そんな学校」の school だと思いました。

これから先の5年間、初心を忘れずに、日々コツコツと努力して、身につけた技術を生かし自分自身で未来を切り開いていきたいです。まだまだ知らないことが一杯で、毎日が驚きとワクワクで満ちあふれています！

「絆を深めたオリエンテーション研修」

今日は、新入生オリエンテーション研修がありました。最初に、学校生活などについての話がありました。教務主事の藤田教務主事は学習について話して下さいました。進級の条件が思っていたより厳しくて少し不安になったけど、しっかり課題の提出をしてテスト勉強も真面目にしようと思ひ、やる気が出てきました。高専の魅力も改めて感じました。学生主事の中谷学生主事は学生生活について話して下さいました。高専の方針をしっかり理解し、特に服装に気をつけようと思ひました。学校行事はすごく楽しみです。学生相談室長の長谷川室長も学生生活について話して下さいました。悩みや問題を抱えた時にはカウンセラーの方々に気軽に相談しようと思ひました。情報処理センターの波多センター長は多要素認証について話して下さいました。難しかったけど、ID とパスワードの脆弱性や覚えのないサインインの承認が求められた場合、ウイルスの感染が疑われた場合の対処法について理解できたと思ひます。講師の有吉なおみ講師は服育について話して下さいました。改めて服の着こなし方の大切さや TPO に合わせた服装などを理解することができ、この先一生役に立つ知識を得ることができました。

次にクラスワークがありました。難しかったけど、楽しんで議論できたのでよかったです。

最後の球技大会では、私のチーム F3-D は全勝できたのでとてもうれしかったです。同じグループの〇〇さんと初めて話したけど楽しく話せたので良かったです。久々のドッジボールで少し怖かったけどいい運動になりました。グ

ループの絆が深まりました。

今日の新入生オリエンテーション研修で、正しい知識が得られたし、高専についてより深く知ることができました。また、友達との絆も深まったので、1日を有意義に過ごせました。とても楽しかったです！

文集は、保護者にも読んでもらうことを前提として作成しているが、第1号に関しては、保護者に読後感想を提出してもらうこととした（提出先は、Teams 経由ではなく、筆者の学校のメールアドレス宛）。以下に保護者の感想（3人分）を再録する（〈F3 保護者の ASHIATO — 『F3 の ASHIATO—新入生オリエンテーション研修編—』を読んでの巻一〉を作成し、4月30日に、Teams の「投稿」にアップロードした）。なお、作文の再録（掲載）に関しては、関係する保護者より「掲載許可」を得ている。

○「息子の後を追いつ返し、根掘り葉掘り訊くわたし・・・げんなりする息子」○番 ○〇の母

学年が大きくなるにつれ、学校からいただくお便りを読むことに時間をかけることはなくなってきました。特に、行事の報告についてのお便りは、5秒ほどかけてざっと目を通したら「あとで捨てる」引き出しに入れるというのが通常です。でも今回は5秒でさばくなど到底不可能。わたしはたくさんの時間をかけてこのお便りと対峙しました。

- ・学生生活についての講話を聴いて、不安と夢が膨らんだこと
- ・服と印象についての講話で、なるほどと感じたこと
- ・マイクロレポートで負けたけれど悔いはなかったこと
- ・午前中は眠りそうになったけれどドッジボールで活躍したこと
- ・筋肉隆々の対戦相手に最後の試合で負けたこと
- ・みんなと仲良くなれたこと

それらは優等生的にまとめられておらず、自分自身の感性と言葉で書かれていました。誠実な文章ばかりでした。まだなんとなく「こうあるべき」といったような硬い文章もありますが、そんな枠はじきに取り払われるだろうとも感じました。読み進めるうちに、このオリエンテーションのために推しのイベントが犠牲になった子に同情したり、ドッジボールで「空気」になった子に共感を覚えたり・・・。

瑞々しく懐かしい感覚も呼び起こされました。

ところが、これだけたくさん情報があるにも関わらず、何かもどかしさのようなものが残りました。どうしてでしょう？ある情報が見つかりません。これは意図的なものでしょうか？それは、マイクロディベートのチーム別個人名とその勝敗です。出席番号から、我が子が「は組」だったということは分かるのですが、そこからがよく分からないのです。息子の感想にもマイクロディベートのことは全く書かれていません。なんともそっけない。もどかしさの正体は、欲しい情報を得られなかった不満でした。

結果、わたしは息子の後を追いかけて、根掘り葉ほり訊くようになりました。どのチームだったの？肯定派・否定派？どんなことを考えて発言したの？こうなると、マイクロディベートのこと以外も詳しく知りたくなります。ドッジボールではチームに少しでも貢献できたのか、講話では寝なかった？お弁当は美味しかった？など。我が家では数日にわたり、この会話が続きました。この会話をする度に、これが先生の目的のひとつではないかと感じつつ……。 (以上です)

*担任からの返信メール

〇〇様

ご返信ありがとうございます。『「新入生オリエンテーション研修の感想』の感想とその後』を拝読いたしました。丁寧にお読み下さいまして、有難うございました。心よりお礼申し上げます。情報は意図的に「隠ぺい」しました。それは、人間が持つ【「隠ぺい」されたものを明らかにしたい】という欲求を(に) ignite (火をつける) することを目論んでいたからであります(親子のコミュニケーションの facilitator (促進剤) です)。こちらの意図を見透かされてしまいましたね。1本トラれました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

〇息子より「〇〇くんの作文？小説？を読んで、読みました」とメールするよう指示がありましたのでメールしました。読みました。なかなかぶっ飛んだ内容でしたが、楽しかったことは伝わるお話でした。それにしても、先生宛にメールするようと、保護者の立場で言われたのは初めてです。これは入学式後の保護者会でメアドを教えていただいたにも関わらず、なかなかメールするきっかけを掴めな

いでいる保護者の為だと予想しました。いかがでしょうか？そうだとなんて素敵な先生だろうと思います。素敵。息子は寮生で心配な事だらけなので、これをきっかけにまた相談させていただけたらと思います。(そんなつもりなかったんやけど…という事でしたらスルーしてください)

今後ともよろしく願い致します。

*担任からの返信メール

〇〇様

ご返信ありがとうございます。〇〇くんのは「別冊」です。「本編」はお読みになられたでしょうか？まだのようでしたら、息子さんが電子データを持っていますので、お読みいただければ幸いです。

10年ぶりの担任で、前回のやり方が通用するかどうか迷っているところですが、これまでの担任でやってきたことをとりあえずやっている感じです。管理職をやっているときに、学生とのコミュニケーションが大事であること以上に、保護者の方とのコミュニケーションの重要性を痛感しておりましたので、今回は、積極的に、保護者の方を巻き込んで(?) クラス経営を行っていかうとの考えの元、このようなイベント(?) を企画した次第です。お母様のような味方(?) がいらして心強いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

〇1日が終わって帰宅した息子に「どうだった？」と聞いてもドッジボールの話くらいしか聞けませんでした。冊子を読んでいると1日しかなかったにもかかわらず、いろんな事を学んでいたのだとわかりました。初対面の人と関わるのがとても苦手な息子ですが、この1日で初めての人とも話せたと聞いて少し安心しました。遅くなって申し訳ありませんでした。行事毎にこんなふうにしていただけると、学校での様子が少し知ることができ嬉しいです。先生は大変な事でしょうが今後も宜しく願いいたします。

*担任からの返信メールは省略。

2・3・2 第2号 (『初めての定期試験』編)

表紙【付録6】に続いて、学生の作文を掲載して、文集を作成した。以下に学生の作文(4人分)を再録する。

「愚か者」

前期中間試験の結果が返ってきました。一教科ずつ返ってくるたびに、自分の想像よりも遥かに低くとても悲しくなりました。赤点もいくつかありました。しかし、高得点が取れていた教科もあったのでよかったです。

今回の前期中間試験から学んだことは、試験対策の重要性です。正直最初のテストということもあってだいぶ舐めてました。ほとんどの教科はテストの前日ぐらいしか勉強していませんでした。その中で唯一対策していた生物だけは、とても点数が高かったのも、次の前期期末試験は全ての教科をしっかり対策したいと思います。得に今回の試験で赤点だった教科は力を入れて対策しようと思います。

次回の前期期末試験は中間試験よりも難しくなっているだろうと思います。中間試験よりも点数を伸ばして、赤点を0にすることを目標として、期末試験を頑張ろうと思います。それと、何にしても甘く見ることは良くないと学習しました。

「初めての定期テスト」

初めての中間試験も終わり、成績も返ってきました。結果を見て、わかってはいたけどショックを受けました。初めての定期テストは明らかに自分の勉強時間が足りなかったと反省しています。特に放課後の時間の使い方を改めて、しっかりと集中できる環境で取り組んでいこうとおもいます。このテスト結果を受けて、授業の受け方、家庭学習の取り組み方を改善していきたいです。また、どんな感じで問題が出題されるかや難易度が何となく分かったので次は同じようなミスをしなないように対策していきたいと思います。次の期末試験まで時間もあまり時間ありません。前回の失敗を繰り返さないためにも早いうちにテスト勉強に取り組み、できないことや分からないところは、先生や、友達に聞きたいと思います。期末テストは、自分で目標を設定して、苦手教科に重点を置いて勉強をしていきたいと思っています。

「千里の道も一歩から」

高専に入学してはじめての中間定期試験を行いました。今回の定期試験で、毎日コツコツと勉強をしていかないといけないということがよくわかりました。中学生だった頃だとあまり試験に向けての勉強をしなくても授業さえ聞い

ていれば悪い点を取ることはあまりありませんでした。しかし、高専に入ると授業を聞いても分からないことが多くなっていき、授業だけの勉強では周りについていくことが難しくなっていました。そこから、前もって授業についての予習をしたり、授業を聞いた後に何度も復習をしていくことが必要だという考えになりました。予習や復習をしていく中で分からないことが多くあると思うので、その時は周りの人から教えてもらったりネットで調べたりして必ず理解できるようにしようと思います。今回の中間の定期試験では予習や復習が足りなかったことであまり良い結果を残すことができなかつたけれど、次の期末の定期試験では良い結果を残せるようにコツコツと地道に勉強していこうと思いました。

「勉強大好きになります。」

今回の前期中間テストを受けて、当たり前だけど、模擬試験や練習問題をたくさん解いた教科の方が点数は良かったです。初めてのテストだからと気を緩めて様子見程度で挑みました。復習も暗記もしっかりせず、テスト前に追い込む形で行い、結果はもちろん良いとは言えないものばかりでした。進級に関わる履修単位、学修単位の仕組みを理解せず受けたことも大きなミスだったと思います。今は何となくですが、これらの仕組みを理解していると思うし、厳しいものだと身に染みて感じたので明確な目標が出来ました。中学までは理科を得意としていたのですが、化学、生物、物理、地学、専門基礎と分かれてより詳しい授業になると、理解が追いつかないものも多く出てきて、他の教科も同様ですが、一日一日の授業が大切に感じました。テスト前の理解が全然できていない危機的状況でも、友達は私を助けてくれました。よくない点数ではあったのですが、友達が教えてくれて、一緒に勉強してくれたおかげで救われたテストもたくさんあったと思います。友達には本当に感謝です。

今後は、自分自身で大体の理解を増やして行って、細かいところで分からないところは友達や先生に聞いて、高得点を狙っていききたいと思います。簡単ではないと思いますが、日々努力していればテスト前の勉強は少しでも軽くなると思うので、今までの勉強スタイルを変えて、より効率よく行います！

2・3・3 第3号 (『夏休みのおもひで』編)

表紙【付録 7】に続いて、学生の作文を掲載して、文集を作成した。以下に学生の作文（3人分）を再録する。

「夏休みのおもひで」

夏休みに入って僕は3つの目標をたてました。1つ目がコツコツ勉強をすること、2つ目が適度に運動すること、そして3つ目ができるだけ良い生活習慣をおくるという目標です。

1つ目のコツコツ勉強をするという目標は初めの方は計画をたてて順調に宿題を進めることが出来ていました。しかしあとの方になっていくと今やった方がいい、早く終わらせた方がいいと分かっているながら面倒な宿題を後回しにしてしまい結局夏休みギリギリまでやることになってしまいました。なので、後期には後回しにする癖を治していくことを意識して学校生活を送っていきたいです。

次に2つ目の適度に運動するという目標は達成できたと思います。特に日中など何も無い時には外でバスケットをして体が怠けないように生活を送っていたのでよかったです。また、夏休みの間部活がなかったので家の前でキャッチボールをしたり友達とソフトボールの自主練もしたりして充実したと思います。

そして3つ目のできるだけ良い生活習慣をおくるという目標はあまりできませんでした。1度遅い時間に寝てしまったら次の日もまたその次の日も寝るのが遅くなって、悪循環になってしまい、生活リズムが崩れてしまいました。学校が始まるまでに生活リズムをなおして、後期のスタートでつまづかないようにしっかりと整えていきたいです。

「夏を感じない夏休みと三つの目標達」

私は、夏休みのおもひでを書くにあたって、夏休みに入る前に決めた「夏休みの目標」を達成出来ているかについて振り返った。

まず一つ目に、「毎日運動をする」という目標、私は夏休み中にコロナ自粛もあってほとんど外に出なかったが、任天堂が出しているフィットネスゲーム「リングフィットアドベンチャー」を毎日1時間程して、目標を達成することができた。

次に、「学力を維持する」という目標、私は夏休みの宿題

をコツコツとし、英語などは、塾で復習をしたり、教科書を読んだりなどして、完全に維持出来たとは言いが、目標を達成することが出来たと思う。

最後に、「専門の予習をする」これに関しては、私の行動力の無さを感じることが出来るくらいにほとんど予習をすることが出来なかった。二年生以降の夏休みでは、しっかりと予定を組み、もっと色々なことに挑戦し、充実した夏休みを過ごせるようにしようと思った。

今回の夏休みは、あまり挑戦をしなかった夏休みであったが、運動が苦手な私が「毎日運動をする」という継続が重要な目標を達成することができたので、少し自分に自信が持てるようになった。また、コロナのこともあって、友人との約束などは中止にし、家でスイカを食べたりなどもしなかったのも、夏ということを感じる機会は少なく、少し寂しい夏になってしまったが、そこそこ充実した夏を過ごすことが出来たと思う。

「終わらなかった宿題」

僕は、今年の夏休みの目標として、「宿題をなるべく早く終わらせる」と夏休みが始まる前に決めました。ですが、この目標は達成することが出来ませんでした。理由は、3つ上げられます。

1つ目は、夏休みが1ヶ月あることによる気の緩みです。夏休みが長いのでそんなに急ぐ必要はないと思ってしまい先延ばしにしてしまいました。その結果、夏休みが終わるギリギリまで宿題に手をつけないということになってしまいました。来年の夏休みは、今回の反省を活かして、先延ばしにしようという考えを捨てて宿題にすぐに取り掛かるようにしたいです。

2つ目は、取り掛かってみると、思っていた以上に夏休みの宿題の量が多かったということです。宿題の数はあまり多くはありませんが、その内容はレポートなどが多く、内容が濃いものばかりでした。これにより、宿題に取り掛かってから終わるまでの時間が長くなってしまいました。

3つ目は、部活動が夏休み後半から始まってしまったことです。これは1つ目と関わるのですが、先延ばしにしていた夏休みの宿題に、部活動が始まったことで、手をつける時間が無くなってしまい、さらに夏休みの宿題が終わるのが遅れてしまいました。

まとめると、宿題を終わらせるのが遅くなった理由は、「夏休みが長いことによる気の緩み」「夏休みの宿題の内容の濃さ」「部活動再開により長引いてしまったこと」です。

来年の夏休みは、今回の反省を活かして、宿題を早く終わらせるようにしたいと思います。

2・3・4 第4号（『体育祭』編）

表紙【付録 8】に続いて、学生の作文を掲載して、文集を作成した。以下に学生の作文（5人分）を再録する。

「先輩たちのカッコいい姿」

高専での体育祭に参加するのは初めてで、事前にリハーサルもしていなかったのでぶっつけ本番で実施するのかなと思わず不安でしたが、先輩たちが積極的に優しくリードしてくれたため安心して競技をすることが出来ました。競技が終わって寮に戻り、自分の部屋から体育祭の様子を少しだけ見ていましたが、応援合戦はこの組もとても印象に残るような応援で、先輩たちの体育祭にかける思いは大きいんだと改めて実感しました。あまり大声を出したりすることも出来ないこのご時世でありながらも体育祭をいものにしようとする先輩たちの姿はとてもカッコよかったですと感じました。

「体育祭」

今日は、体育祭がありました。体育祭といっても新型コロナウイルスの影響でとても縮小されたものでした。一年生はクラスごとでリレーをしました。前半と後半で分かれていて、自分は後半で走りました。前半の結果は、2着で見ているだけでもとても面白かったです。後半の結果は、1着でした。自分はとても久しぶりに全力で走ったので、とても疲れました。しかし、軽々と走っている人もいて普段から運動するようにしたいなと思いました。

今年の体育祭は、100m走っただけで終わってしまっただけで、来年はいろんな競技をしてみたいです。

「参加時間約10秒」

前期に無理やりねじ込まれた体育祭が始まりました。高校生活初の体育祭です。出場したのはなんと1種目。1年生対抗リレーです。僕は足が速くも遅くもないので、走順が

だいたい真ん中の方でよかったです。あとバトンパスも上手くできるか不安でしたが、僕が走り出した時は5位だったのでプレッシャーはかなり軽減されて良かったです。逆に走り終わりの時は3位だったのでちょっとプレッシャーがありました。普通にバトンを渡せたので良かったです。前半2位、後半1位という成績でした。みんな運動神経凄すぎますね。10月半ばにある高専祭も楽しみです。

「体育祭を終えて」

新型コロナウイルスのまん延予防処置のもと、体育祭が行われました。規模が大幅に縮小されている中、必死にみんなを盛り上げようとする先輩の姿に感服しました。中には全身タイツの方や、白鳥のコスプレをなさる方もいらっしゃいました。一年生の全員リレーでは前半二位で後半で一位だったので、学年全体でも一位でした。とても嬉しかったです。他学年の競技や、色別対抗リレーでも、緑組が一位になって優勝するのを期待しています。

「体育祭面白かった」

今日は、体育祭ありました。リレーを見ていてみんなが一生懸命走っていてカッコいいと思いました。リレーで集合する前に応援団がみんな揃って歩いていた時に、応援団がすごくカッコいいと思いました。夏休みに部活などで学校に行っていた時に、応援団が練習をしているのを見てすごくカッコよかったです。応援団の応援合戦を見られなかったのは残念だけど来年は見られると嬉しいです。すぐ終わった体育祭だったけど楽しかったです。来年が楽しみです。

2・3・5 第5号（『弁論大会・高専祭』編）

表紙【付録 9】に続いて、学生の作文を掲載して、文集を作成した。以下に学生の作文（5人分）を再録する。

「初の弁論大会」

私たち F3 はマイクロディベートということで教室で簡単にすることがありました。今回、私はリモートという形ではありましたが、弁論大会のディベート大会を見ました。お題がとても難しいにも関わらず、相手にしっかり伝えられるような文を考え主張していてとてもすごいと思いまし

た。森先生や蓑輪先生もしっかりと根拠があり、良かったと思えました。途中でお互いにギターを引いたり、服を脱いでお揃いにしたりと変わったところもありました。しかし、それ以外の部分では相手にきわどい所を質問されてもいいように対策がされており、話し合いでお互いの意見を交わして、勝とうという意思がリモートでしたがとても伝わりました。本当に貴重なものを見せてもらいました。今度 F3 クラスでまたマイクロディベートがあるので、その参考になって良かったです。来年、再来年に弁論大会に出場するかは分かりませんが、出る機会を貰えた時には、頑張っって主張したいです。

「学びと満足感を得た週末」

今まで僕は、小、中、そして高専に入ってすぐのクラス別レクリエーションでディベートを行って来ましたが、今回映像越しに見た弁論大会は、今までのディベート以上に白熱していて、勝負の勝敗が決めづらい試合ばかりでとても面白かったです。映像越しだったため音質があまり良いものとはいえ聞き取りにくい部分はありませんでしたが、実際に証拠を提示したり聞き手が印象に残るような話し方を心がけていたりそれぞれのチームで違った工夫が見られ、そういった面で今後のディベートに生かせそうだなと感じました。そして高専祭、用事があったため全ての企画を見ることは出来ませんでしたが、吹奏楽部の演奏やダンスステージなど、見ていてとても満足感がありました。吹奏楽部には森先生や仲のいい寮生など、演奏に出ることを知らなかったのが少し驚きましたが、とてもカッコいいステージだったと感じました。中学校とは違うより自由度が増した学校祭で、友達と一緒に露店をまわって食べ物を買って食べるのは地元で開催された一昨年の三国祭以来だったので懐かしさを感じることもありました。とにかく、楽しい週末を過ごすことができるとても嬉しいです。来年はコロナがおさまるといいですね…

「弁論大会・高専祭」

僕は日曜日高専祭に行きました。その日はとても寒くてビックリしました。僕は友達と色々回りました。美味しそうなのを売っている露店が沢山ありました。その中でも僕は豚汁が1番美味しかったです。その後僕達はスマブラ

大会を見に行きました。僕は、〇〇か部活の先輩が優勝して欲しかったのですが、〇〇は惜しくも負けてしまい、部活の先輩は決勝に進出したものの負けてしまいました。でもいい試合を見ることができました。その後には、森先生のバンドを見ました。いつもの特活の時間に見るのとは違って生で見るととても迫力があって凄かったです。蓑輪先生の歌とギター、森先生のドラムとても凄かったです。また生で聞きたいです。次に抽選会がありました、僕は何も当たらなかったけど、F3の人達が沢山当たっててびっくりしました。花火はとても綺麗で凄かったです。

「凄かった」

今日の弁論大会を振り返って、自分たちは出場しませんが、文化委員として今日まで準備をし、当日は観客として参加しました。私は、今までに小・中・高とディベートをしたことがありましたがこんなにも客観的に見たことはなかったので、良き経験となりました。先輩方の弁論大会の様子は、今後の自分にとっても参考になりました。

初めての高専祭では、装飾部門に所属していたので、夏休みからずっと高専祭準備に取り組んでいました。看板は、ペンキを使って色やフォントを工夫しながら、仕上げていきました。日々の準備はとても大変でしたが、先輩方に教えて頂きながら、一緒に大きな看板を作り上げることができました。また、絵を描く以外にも装飾部門では、お花を作ったり、大きなタイムスケジュールを書いたり、設置をしたり多くの準備がありました。

今回の学校行事は、裏方として今までにしたことのない経験を積むことができ凄く大変でしたが成長できた時間でした。

「高専祭」

私は高専祭を土曜日と日曜日どちらも楽しんだんですけど、高専祭ってすごいなって思いました。高専ではない友達に文化祭の話聞いても今年は面白くなかったと言っていた人が多い中でこんなにも派手に祭りをできることがすごいいいと思えました。土曜日は吹奏楽を見せてもらったんですけど、どの曲もすごくいい演奏で楽しませてもらいました。ソロパートをしてる人たちもすごくみんな上手で、凄かったです。露店のほうも食べ物しか食べてないんですけど

どれも美味しく、値段もまだ安い方だったと思うので少し食べすぎてしまいましたね。日曜日は午後から行き、MMC と花火を見ました。MMC はどのバンドもすごく上手くて、どのバンドもかっこよかったです。花火は15分間くらい上がっていたと思うんですけどすごく綺麗でした。文化祭で花火が上がるってところも高専ってすげえなあって思いましたね。色々今年は楽しめたので、来年少し余裕があったら運営の方をやってみたいなと思いました。

2・4 保護者懇談会（三者面談）

10月31日（日）に保護者懇談会を実施したが、県外出身の3名のうちの2名（滋賀県出身）に関して、同日に帰省していることが事前に分かっていたので、当日は、Teams チャットのビデオ機能を用いて、学生、保護者、クラス担任である筆者による三者面談を行った（残りの1名は静岡県出身で帰省をしていなかったため、本人は、教員室に来てもらい、保護者とは Zoom を使う形で三者面談を実施した）。また、当日、所用で、面談ができなかった保護者（県内在住）に関しては、学生が帰宅後、Teams 経由で三者面談を行った。

Teams のビデオであっても、対面と変わらず、充実した面談を実施することができたことから、今後は、福井県内在住であっても、遠方の場合には、三者面談をする際に、積極的に Teams（但し、学生と保護者が同じ場所にいる必要がある）を活用したいと考えている。

3. 教科指導

本節では、教科（英語）指導を目的とした Teams 使用の実践例を紹介する。

3・1 Teams「投稿」履歴（10月末日分まで）

一般に、英語を含む外国語の習得には、授業外の勉強（自学自習）が必要不可欠であるとされている。筆者は、授業に関する情報に加えて、学生の自学自習を促進するための一助として、Teams の「投稿」に下記の資料をアップロードした（アップロードは、基本、授業日の放課後に実施）。

・授業で使用した PowerPoint、英文の日本語訳、教科書お

よびワークブックの正解（すべて PDF に変換）

- ・単語テスト用対策プリント（PDF）
- ・過去問（定期試験）および正解（PDF）

[04/08 20:17] 「英語オリエンテーション資料」、「授業進捗計画①（前期中間試験まで）」のファイルの UP!

[04/08 20:13] 来週の春休み課題テストについて

来週水曜日に春休み課題テスト（前期中間成績 10 点分）を実施しますが、下記を中心にしっかりと準備をして受験するようにしてください。

①選択問題もありますが、基本、記述問題です（数字、数式等のほかに、「福井高専」「所属学科」も英語で書けるようにしておくこと）。

②勉強の仕方は、眺めるだけではなく、手が覚えるまで（手に書いて試験を受けるということでない、当然のことながら）、何回も書くこと（発音も同時並行的に行えると理想ですが、、、）

◎英単語、英語表現の覚え方の「基礎作り」は、何回も書いて、何回も（正しく）発音することです（小学校の時に、漢字を覚えた時の方法とよく似ていますね。）。時間はかかりますが、確実な方法です。

それでは、皆さんの健闘を祈ります。

この投稿を読んだ学生さんは、「いいね」等のレスポンスをお願いします。

[04/11 21:06] ノートの作り方について（ノート提出に関連して）

ノート提出について質問がありましたので、全員に向けて回答します。予習は本文、日本語訳のみですが、ノート提出には、授業中の活動状況を確認する目的がありますから、授業中に行った練習問題の演習結果もノートに記載する必要があります。したがって、基本的には、見開きの左のページに本文、日本語訳を書き、右のページには演習結果（練習問題の解答、正解）を書くようにしてください。

事前にお話しておけばよかったのですが、すでに別のやり方をしてしまっている人はその方法を踏襲しても、上記のように修正してもかまいません（日本語訳用、問題解答用の2冊のノートを作ってしまった人は、ノート提出時には2冊提出することになります）。

本メールを確認した学生さんは、「いいね」等のレスポンス

をお願いします。

[04/15 21:37] Fundamental Science in English (以降 FSE) (Les.1, Part 1)の PP と音声ファイルの UP

上記ファイルを UP します (日本語訳は、Part 4 が終わった段階で UP します。Workbook の答え (Part 1~Part 4) は、後日、一挙に UP しますので、単元が終わるごとに、Workbook の該当箇所の問題に解答し、各自、答え合わせをしておいてください (直接書き込み、専用のノート作成のどちらでも可)。

[04/22 13:53] FSE(Les.1, Part2)の PP と音声ファイルの UP

[04/22 13:55] FSE Workbook Les.1 の正解ファイルの UP

[04/22 13:56] 前期中間単語テスト対策プリントのファイルの UP

[04/25 16:30] 授業計画① (修正版) のファイルの UP

以前、UP した授業計画①に間違いがありました。修正版を UP しますので、確認してください。間違えて、申し訳ないです。

[04/29 12:38] Lesson 1 Part 1 & Part 2 Worksheet のファイルの UP

上記ファイルを UP します。連休中に取り組むと良いでしょう (別に宿題ではありません。でも、やっておくと、定期試験対策になることは間違いありません)。

[05/06 13:35] Lesson 1 Part 3 の資料 (ファイル) の UP

[05/07 12:07] Lesson 1 Part 1~Part 3 の PowerPoint File (PDF 版) の UP

PowerPoint File が開けないというチャットがありましたので、PDF 版で再 UP します。たぶん、開けると思います。

[05/09 11:32] 発音記号読み方早見表 (ファイル) の UP

発音記号の読み方の早見表[PDF]を UP しますので、自主学習に役立ててください。

[05/13 13:19] Lesson 1 Part 4 の資料+Lesson 1 日本語訳の UP

[05/27 11:39] 単語テスト①の対策プリント (ファイル) の UP

[05/28 18:28] 単語テストは 6 月 2 日 (水) に F3 教室で実施します (全問選択問題 100 問、試験時間 30 分)

以前、teams に Up した授業計画通りに、上記のように単語テストを実施します。しっかり、勉強して受験してくだ

さい。前期中間成績 (100 点) のうち、20 点分が割り当てられます。前期中間成績=前期中間試験 (50 点分) +課題テスト (実施済み) (10 点分) +ノート提出点 (10 点分) +Workbook 提出点 (10 点分) +単語テスト (20 点分)

[06/02 12:44] 【重要】前期中間試験 試験範囲(英語 I)

・ Fundamental Science in English [textbook]

(ii)-(iii), pp.2-12, [workbook(pp. 5-12)]

・ 中学英文法 (中文) を修了するドリル

pp. 197-203 (p.202 は除く)、p. 209

[06/03 12:12] 過去問(英語 I) (ファイル) の UP

[06/15 16:15] 授業計画② (ファイル) の UP

[06/16 7:11] 映画上映は 10:40 から始めます。

今日から、休み時間は 10 分に戻ります。したがって、2 限目は 10:40 に始まります。10:40 には上映を開始しますので、その時間までに大講義室にきて座席に着席するようにしてください。

[06/17 13:42] 前期期末単語テスト②の対策プリント (ファイル) の UP

[06/17 13:56] FSE (Lesson 2 (Part 5 以外)) Worksheet (ファイル) の UP

[06/23 15:25] 前期期末試験過去問の UP

[06/24 13:10] Les.2 Part 1 のファイルの UP

関係代名詞に関しては、「中学英文法を修了するドリル」の Les.27,28 も読んでおいて下さい。

[07/01 11:58] Les. 2 Part 2 のファイルの UP

[07/07 14:58] 本日のリスニングテスト

今日の 3 限目に実施したリスニングテストの概況は以下のとおりです。

5 点 : 5 人、4 点 : 12 人、3 点 : 8 人、以下省略

* 来週も同じ形式でリスニングテストを実施しますので、プリント(明日の英語Ⅲの時間に配布)をしっかりと予習して、受験して下さい。

[07/08 11:33] Lesson 2, Part 3 のファイルの UP

[07/09 8:46] Lesson 2, Part 3 Workbook の答えに関して

p.17, Expressions の 2 に関して、「一定速度」の答えで、模範解答では、a (constant) (speed)となっているが、a (given) speed ではだめかという質問を受けました。given は元来「与えられた」という意味でそこから、「指定された」⇒「変化しない」⇒「一定の」と意味が派生し、授業でも

given に対して「一定の」という訳語を提示しました。一方、constant は、元来「変化しない」という意味で、そこから「一定の」という意味が派生したものです（Part 3 では、名詞としての constant が使われていますが、形容詞の意味もあります）。問題文が一文（文脈が与えられていない）なので、どちらも正解になりえますが、一般的には constant が答えとなると考えられます（その理由は、given の場合、ドライバーが、例えば、50km/h で走るように命じられて、その指示にしたがって、50 km/h という「一定」のスピードで、車を走らせているというニュアンスが生まれ、かなり特殊な文脈を想定する必要がありますが、constant は、（スピードが変化することなく）「一定の」という意味なので、特殊な文脈を想定する必要がないからです）。

[07/14 14:53] **本日のリスニングテスト**

本日実施したリスニングテストの概況は以下のとおりです。

5点：12人、4点：11人、3点：8人 以下省略

[07/14 16:47] **前期期末試験対策プリント（ファイル）の UP**

〇〇先生が英語 I の授業で使われているプリントを、提供していただきました。試験対策に活用して下さい。

[07/15 11:37] **Lesson 2, Part 4 のファイルの UP**

[07/15 12:01] **Lesson 2, Part 4 の PowerPoint(訂正版) の UP**

[07/20 11:37] **Lesson 2, Part 5 のファイルの UP**

[07/26 15:56] **【重要】ノート・Workbook の提出について**
7月29日「木」2限目の英語 I の時間にノートおよび Workbook の回収をします（H.R.終了後に返却します）。この時間以外は回収をしませんから、気をつけて下さい。

[08/02 16:40] 明日の1限目は英語 I の授業（テスト勉強）です（於：F3 教室）。

[08/12 18:41] **FSE(Lesson 3)の小テスト、復習テスト（ファイル）の UP**

後期中間試験の試験範囲は、FSE(lesson 3)と中学文法（完了形）です。今回も試験作成担当ではありません。

[08/13 8:39] **単語テスト（後期中間）の対策プリント（ファイル）の UP**

[08/19 19:13] **後期中間試験の過去問の UP**

適宜、取捨選択すること：後期中間試験範囲は FSE(Lesson 3)+中学文法（現在完了）2019年度の正解は後日 UP する

予定です。

[08/20 16:53] **2019年度後期中間試験（英語 I）の正解ファイルの UP**

[09/21 14:49] **授業計画③の UP**

[10/04 16:11] **Lesson 3 Part 1 の資料の UP**

[10/04 19:58] **【重要】水曜日の英語の時間に Lesson 3 Part 1 の小テストをします。**

[10/11 16:08] **Lesson 3 Part 2 の資料の Up**

[10/19 21:30] **【要注意】授業時にテキストを忘れた場合、1回ごとに後期中間成績から2点減点します。**

[10/26 18:56] **【重要】明日（水曜日）の英語の時間は Lesson 3 Part 3 の小テストとリスニングテスト B の予行をします。**

[10/28 13:49] **【重要】11月1日（月）の英語の時間終了後にノートとワークブックを回収します（絶対に忘れてこないこと）**

ノートは Lesson3 の本文、日本語訳、テキストの問題解答、授業中の板書事項等が書かれているかを確認します。（10点分）ワークブックは lesson 3 の問題解答、丸付けがされているかを確認します。（10点分）上記の時間以外は受け付けません。

[10/29 9:36] **【重要】11月1日（月）の授業では『FSE』と『Mr.Evine の中学英文法を修了するドリル』の2冊を使用します。**

[10/29 9:52] 11月8日（月）の授業では Lesson 3 の単元テストをします（試験時間 30分）。

成績評価には加味しませんが、しっかり勉強して受験するようにしてください。

学級担任をしているクラスの学生を対象にした、資料の利用状況、自学自習の促進の度合に関するアンケート（Microsoft Forms 利用）の結果を以下に示す。

質問 1： Teams 「投稿」に UP されたテキスト(FSE1)の PowerPoint 資料、本文の日本語訳、テキスト・Workbook の問題の正解、定期試験過去問等を、復習や試験勉強にどれぐらい利用していますか。

- a. 大いに利用している・・・32.5% (13/40)
- b. ある程度利用している・・・55.0% (22/40)
- c. あまり利用していない・・・7.5% (3/40)

d. ほとんど利用していない・・・ 5.0% (2/40)

質問2 : Teams に上記の資料が UP され、それを利用できることは、あなたの英語の勉強（復習や試験勉強）を促進していますか。

a. 大いに促進している・・・ 42.5% (17/40)

b. ある程度促進している・・・ 40.0% (16/40)

c. あまり促進していない・・・ 15.0% (6/40)

d. ほとんど促進していない・・・ 2.5% (1/40)

3・2 Teams「チャット」履歴（10月末日分まで）

英語に関して、質問がある場合には、「チャット」を用いて気軽に聞いていいと指示したところ、複数の意欲ある学生（学生 A、B、C、D）が質問をしてくるようになった（特に、学生 A の頻度が突出している）。

以下にこれまでのやりとり（英語に関する質問とそれに対する回答）を列挙する（チャット内容の掲載に関しては、関係学生から「掲載許可」を得ている）。また、質問（とその回答）の中には、クラス全体に周知したほうが良いと思われるものもあったため、その場合には、授業中に、言及することとした。

○[04/24 17:52]学生 A

こんにちは 英語の事で聞きたいことがあるのですが、疑問文に対して、○○did.や ○○does.という風に答える時の疑問文というのは、常に【疑問詞+平叙文】になる。というのは正しいのでしょうか。教えて下さい。

[04/24 22:28] 教員

こんばんは。どのような経緯で、そのような疑問が湧いたのかわかりませんが、A good question ですね。ちょっと、長くなるかもしれませんが、以下に具体例を用いて説明します。

{1}（待ち合わせをしている状況で、待ち合わせ時間に自分が遅れそうな時：ターゲット文のみ英文で示します）

A : 待ち合わせに遅れそうだ。

B : Who is waiting for you? (誰が君を待っているの?)

A : Sadashi [is]. (サダシだよ)

ここでは、Who がスロット（変数）で、そこを Sadashi で埋めることになるので、答え方は、○○ (is/are/do/does/

did.)となります。[] は、実際に使われる英語では省略されることがあることを示しています（一般に、学校文法では、省略してはいけないと教えられますが）

(2) (A が待ち合わせの定番の場所に立っていたところ、友人 B が A を見かけて)

B : だれか待っているの?

A : うん。

B : Who are you waiting for? (君は誰を待っているの?)

A : [I'm waiting for] Sadashi. (サダシだよ)

学校文法では、上記のような応答になりますが、実際の英語では、【サダシだよ】ということ伝えたい気持ちが強く、Sadashi is.と答えてしまう場合があります。

したがって、【疑問詞+平叙文の語順?】の場合の応答は、○○ is/are/do/does/did.となりますが、そうした答え方をするのは、【疑問詞+平叙文の語順?】の疑問文に対する場合に限られるとは、(学校文法の範疇では言えるかもしれませんが)、実際に使用される英語（記述文法）まで範囲を広げた場合には、そうだと断言することはできません。

[04/24 23:30] 学生 A

深く理解出来ました。夜遅くに有難う御座います!

[04/24 23:33] 教員

教員（研究者）としては、理解してもらえて、説明した甲斐がありました。

[04/24 23:34] 学生 A

中学3年の頃から、モヤモヤしていた部分だったので、とてもスッキリしました。本当に有難う御座います。

○[05/03 16:30] 学生 A

こんにちは 大変お世話になっております。このような発音の問題（Workbook 同じ発音を含む語を選ぶ問題）が全く分からないのですが、解く上でのポイントを教えて下さい。

[05/03 17:08] 教員

授業の時にも話しましたが、英語の場合には、発音と綴りの間には、ほぼ相関関係がないので、極端な話、ひとつひとつ覚えていかなければなりませんーその際は必ず、音読して覚えることが大事です。まずは、今回の問題の単語の発音を英語辞書で確認してみてください（必要があれば、発音記号の読み方も授業で触れます）。

[05/03 21:56] 学生 A

分かりました。気をつけて勉強を進めてみます。授業で発音記号の読み方に触れていただけると有難いです。

[05/03 21:57] 教員

了解しました。

○[05/20 19:03] 学生 A

こんばんわ 大変お世話になっております。I gave a ticket to Osaka to Ken. この文は第3文型で合っていますでしょうか。

[05/20 22:48] 教員

I (S) + gave (V) + a ticket (O) to / for Osaka + to Ken. (to/for Osaka, to Ken は前置詞句なので、5文型の要素としない)。したがって、第3文型です。

[05/20 23:19] 学生 A

分かりました！ 有難う御座います。

○[05/23 15:55] 学生 A

こんにちは 大変お世話になっております。I apologize to him for what I have done. という文は、「誰に何を」という要素があるため第4文型でしょうか。

[05/23 15:59] 教員

5文型は「意味」で判断すると間違えます。授業でもお話ししましたが、前置詞句(to him)(for what I have done)は文型の要素から除外しないといけませんから、上記は、I (S) + apologize(V)+...の第1文型です。

[05/23 16:04] 学生 A

有難う御座います。I am from Fukui. のように前置詞があるのに、第一文型以外の文型になるものがあると思うのですが、from ○○.のように前置詞だけ前置詞として扱われない場合のある前置詞には他にどのような物がありますか。テストに出そうなものも含め、教えて下さい。

[05/23 16:15] 教員

言語学者の間でも controversial (論争となる) な話題に入ってきましたね。be 動詞は、大別して、existence (存在) と copula (=) の意味があり、I am in Fukui. の場合、am は「いる」という意味で、in Fukui は前置詞句と取り、第1文型(「わたしはいる」で一応意味を成す)と判断し、I am from Fukui. の場合、am は「=」の意味で、I = from Fukui (福井出身者) と解釈し、第2文型(「I =」だけでは意

味が完結していない) と判断するのが、一般的です。但し、言語学者によっては、異なる解釈を提案する人たちもいます。見た目は前置詞句でありながら、形容詞句あるいは副詞句のような働きをしている場合は、5文型の要素とすることがあるということです。その他の例ということですが、He looks like his father. (彼は父親に似ている) は、like は前置詞ですが、この文は、通常、第2文型と判断されません。なぜなら、He looks だけでは意味をなさず、look は copula (見た感じでは=) と解釈し、I am from Fukui. の am と同じ働きをしているものと捉えて、He = like his father (彼の父親に似ているもの) と解釈するために、SVC の第2文型と考えるのが一般的です。be 動詞が「存在」を表す場合は、第1文型、copula (=) の場合は第2文型と考えれば、区別がつけられると思います。

[05/23 16:34] 学生 A

納得しました。日曜にも関わらずご丁寧に有難う御座います！

○[05/28 8:01] 学生 A

Can you lend some money to me? という文なのですが、「私のために」と訳そうと思うと訳せると思うのですが、for me じゃだめな理由を教えてください。

[05/28 8:16] 教員

to を使うのは、lend という動詞によって、money が (you から me に) 「移動」するということが含意されているからです (ものの「移動」が想定される場合は to、それ以外は for ですー授業中にお話しした内容です)。lend money to A for 名詞/動名詞 (～のために A にお金を貸す) という表現はあります。lend A B=lend B to A であり、日本語で「わたしのためにお金を貸してください」と言えるからと言って、英語で for が使えるわけではありません。

[05/28 8:23] 学生 A

分かりました。復習不足でした。有難う御座います。

○[06/05 17:18] 学生 A

こんにちは 大変お世話になっております。I multiply A by B. という文は前置詞句が入っていますが、前置詞句を除くと文として成り立たない気がします。これは何文型になりますか。

[06/05 20:19] 教員

by 以下がないと、追加情報を聞きたくない文です (I multiply A. で終わると、通常、聞き手は、By what (何で (かけるの)) ? と聞きたくなります) が、I multiply A 自体は「文として」成立しているの、文型としては、I (S) multiply (V) A (O) [by B]の第3文型です。

[06/05 20:43] 学生 A

分かりました。本当に有難う御座います。

○[06/06 13:43] 学生 A

こんにちは 大変お世話になっております。How many cars can the factory produce a day? How many days do you go to school in a week? なぜ a week には、in が付くのですか。教えて下さい。

[06/06 15:42] 教員

1文目の a day の a は per に置き換えることができるもの (a は冠詞としての機能を失っている) で、この day は「時間の (長さの) 単位」としての意味合いが強いものです。2文目の a week の a は one の意味で使われています。当然、How many days do you go to school a (=per) week? という言い方も可能です。どちらの表現も「一週間につき」と訳せることから、一般的には、「一週間につき」の意味で使われる in a week の in は省略可能であるといった説明がなされますが、私が専門としている認知言語学の考え方で説明すると、week の「捉え方」の違いが、反映しています。week を「単位」(より抽象的なもの)として捉えている場合は、a week が、他方、week を、例えば、「(月・火・水・木・金・土・日)」「(7日の) 集合体」(より具体的なもの)として捉えている場合—表現が適当ではないかもしれませんが—は、in a week が選択される傾向が強いと言えます。まとめると、「{1日・1週間・1か月・1年}につぎ」に相当する英語表現において、native speaker は、day/week/month/year を「単位」として捉えている場合は、a {day/week/month/year} の形を、そうでない場合は、in a {day/week/month/year}の形を選択(使用) {する/している} と言っていいでしょう。

[06/06 17:15] 学生 A

とても分かりやすかったです。ご丁寧に有難う御座います！

○[06/25 16:25] 学生 A

こんにちは 大変お世話になっております。空白 3 つに英語を入れるという問題です。I saw the woman — — — once. “あの男性がかつて愛した女性を見ました。正解は that, man, love でした。自分は、I saw the woman. と The man loved the woman once. という二文の合成だと考え、目的格のため、関係代名詞を省略可能だともい、I saw the woman the man loved once. にしました。これでは不正解でしょうか。

[06/26 21:11] 教員

解である that man loved における that は「あの」という意味の指示代名詞です (対義語は this)。この場合、関係代名詞は、目的格) を省略しない形だと、I saw the woman {who/whom/that} than man loved once. が関係代名詞を使った表現になります (括弧内は省略可能です)。

[06/26 21:13] 学生 A

すみません。“あの” 男性 の “あの” という要素を入れることを忘れていました。今後は、よく確認したうえで質問するよう心掛けます。

○[07/22 21:42] 学生 A

こんばんは 大変お世話になっております。

・この伝統的な料理では、ステーキはフライドポテトとともに提供される。In this classic dish, steak is () with French fries. ① supplied ② delivered ③ served ④ presented では、supply, serve, provide はどれを入れても成り立つのでは、無いのですか。

[07/22 22:46] 教員

{supply/provide} A with B は「A に B を供給/提供する」という意味で、その受動文は A is {supplied/provided} with B で「A は B を供給/提供される」という意味になります。したがって、カッコ内に、supplied/provided を入れると、「ステーキはフライドポテトを供給/提供される」という意味になってしまいます。steak is served with French fries. の能動文は 例えば、The chef serves steak with French fries. (その料理人はステーキをフライドポテト付きで提供します) となり、この with は「〜といっしょに」という意味で、supply/provide A with B の with とは別物です。

[07/23 6:24] 学生 A

理解しました。夜遅くに返信いただき、有難う御座います！
納得しました！

○[07/24 7:18] 学生 A

大変お世話になっております。propose と suggest は、「提案する」という使い方をする時にかぎり置き換え可能でしょうか。

[07/25 8:16] 教員

どちらも「提案する」という意味があり、その点では、置き換え可能と言えますが、認知言語学では、「形が異なれば、意味が異なる」ので、厳密には置き換え可能ではありません。propose は「(積極的に) 提案する」、suggest は「(控えめに) 提案する」といった感じでニュアンスに違いがあります(辞書にも載っています)。

[07/25 8:17] 学生 A

分かりました。次回からは辞書を確認した上で質問するようにします。

○[07/24 15:45] 学生 B

お忙しい中、すみません。英語 1 を勉強していたところ、スクリーンショットにマーカーで線を引いたところが分かりませんでした。

C 2 I cannot believe the story [which/that he told to me last night].

なぜ told me の間に to が入るのでしょうか。解答よろしくおねがいします。

[07/25 8:10] 教員

元の文を勘案すると、to がない形が模範解答ですね。to があっても英語の表現としては間違いではありません (He told the story to me が元の文だと、to が入り、He told me the story が元の文だと to を入れないと一応説明できます)。授業の時に説明した記憶がありますが、混乱させてしまい申し訳ないです。

[07/25 8:24] 学生 B

丁寧ありがとうございます。よく分かりました。

○ [07/25 16:04] 学生 A

The area of the triangle is half as large as the area of the

parallelogram. という文と、The area of the triangle is half the area of the parallelogram. は、同じ意味だと認識しています。なので、“面積がこの円の5分の3であるような円を描きなさい”の英訳で Draw a circle whose area is three fifths as large as this circle. という文と Draw a circle whose area is three fifths the area of this circle. は、同じ意味で、どちらも合っているという認識で正しいでしょうか。

[07/25 16:54] 教員

1 文目の as large as の後には、that (=the area) of が必要でしょうね。

[07/25 17:06] 学生 A

分かりました。ところで、2 文目の英文は正しいでしょうか。

[07/25 17:09] 教員

正しいです。

[07/25 17:13] 学生 A

過去問の答えを見ていると、答えが 1 つしか書いていないため、その度に質問をするかもしれません。宜しく願い致します。

[07/25 17:14] 教員

了解しました。

○[07/27 20:13] 学生 C

夜分遅くにすみません。F3 の○○です。英語 I の一部を変えての英作文は、どのように対策すれば良いでしょうか？

[07/27 20:16] 教員

難しい質問ですね。まずは、教科書本文を徹底的に頭に叩き込むことですかね。文法のまとめのところを見ておくことも大事です。

[07/27 20:18] 学生 C

分かりました。回答ありがとうございます！

○[07/29 18:02] 学生 A

こんばんは 大変お世話になっております。非制限用法の which は、接続詞と代名詞に置き換えられる、と書いてあります。では、A square, which is a regular polygon, has the same sides and angles. という文は A square, and it is....に置き換えられるのでしょうか。

[07/29 19:02] 教員

良いところに気づきましたね。この場合、「接続詞+代名詞」で置き換えることはできません。正確には、『非制限用法の場合、関係代名詞は「接続詞+代名詞」に書き換え可能な場合がある』ということです。

○[07/31 16:48] 学生 A

大変お世話になっております。Draw a line from the opposite side to the base so that the line is perpendicular to the base. という文の中央付近に the opposite side to the base という言葉があります。名詞を 2 語以上で説明する場合は名詞の後ろに付けて修飾するというのを習ったので、the side opposite to the base が正しいと思ったのですが、この考えは誤りでしょうか。

[07/31 16:55] 教員

この文の構造は、Draw a line from A to B (A から B に直線を描きなさい (引きなさい)) なので、the side opposite to the base だとこの構造を壊すこととなります。但し、「底辺と向き合う辺」を英訳しなさいという問題であれば、この表現 (the side [(which is) opposite to the base]) が使えます。

[07/31 17:11] 学生 A

すみません。名詞の修飾のことばかりを考えていて文の構造を、考えていませんでした。有難う御座います。

○[08/09 16:17] 学生 A

My father weighs twice my weight. という文は、twice のあとに名詞を置く 一般的な文だと思っております。On the moon, you weigh one sixth of your weight on the earth. という文では、分数の後に名詞を置かず of を挟んでいます。この違いが生まれる理由は、weight の訳し方の違いにあるのでは無いかと思ったのですが、違いますか。

[08/09 19:05] 教員

良い質問ですね。My father weighs twice my weight. は「私の父は私の重さ (体重) の 2 倍の重さ (体重) がある」で、weigh は、「状態」を表す一方、On the moon, you weigh one sixth of your weight on the earth. は「月 (の上) では、あなたは、地球にいる時の体重の 6 分の 1 の重さ (体重) になる」と解釈するのがより自然なので (「重さである」も可)、weigh は「状態変化」を表しているように見えます。こう

したことから、of の有り無しは、訳し方の違いと言えそうですが、weigh の辞書的意味には、「状態変化」の意味は載っていないので、究極的には、同一物 (者) の場合 (「~倍」 (分数表現も含む) の表現の付加により、weigh に「状態変化」の意味合いを持たせたくりますが)、of が付加されると考えた方が良いかもしれません。

[08/09 19:16] 学生 A

なるほどです。ワークや例文を見ていて思うのですが、「twice」や「one fourth」の後に of を付けるか付けないかという判断が難しいのですが、どのように判断したら良いのでしょうか。

[08/09 20:38] 教員

基本的には、twice や one fourth の後に [as 形容詞・副詞 as] が省略されていると解釈できる場合は、of は不要と考えればよいと思います (例外事項も多いですが)。

○[08/15 11:26] 学生 A

大変お世話になっております。~ can hardly move. では、「hardly」の働きで、~ はほとんど、動くことが出来ない という文になると思っています。ここからは、無意味な事ですが、I cannot hardly move. という文は存在し得るのでしょうか。

[08/15 13:27] 教員

文法的には、可能ですが、実際の使用 (わかりやすく伝えるという観点) では、ほとんど、使われない表現です。但し、You can hardly move, can you? 「ほとんど動けないだろ？」を否定する目的で、I can NOT hardly move. という応答はあり得ます (但し、not は強調されて発音される)。また、hardly の影響で、can hardly というべきところを、cannot hardly (意味は can hardly) ということがあります (言語学的には leakage 現象 といいます)。

[08/15 15:37] 学生 A

分かりました。有難う御座います!!

○[08/17 14:53] 学生 D

質問です。なぜアメリカは英語名で The United States of America と、冠詞の the があるのに対し、日本は Japan と、冠詞の the がないのでしょうか。

[08/17 14:58] 教員

国名は基本的に the はつきませんが、例外として、複数の集合体として国が成立して場合は、the がつきます。アメリカ合衆国（州の集合体）。フィリピン((Republic of) the Philippines) フィリピンの島々の集合体。

[08/17 15:04] 学生 D

ありがとうございます。固有名詞の場合、the を付ける基準はあるのでしょうか。the university of Tokyo などの建物の名や地名、人物名のように

[08/17 15:06] 教員

基準はあるようで、ないので、一つ一つ覚えていくしかありません。(発音も同じ)

[08/17 15:07] 学生 D

わかりました。ご教示ありがとうございます。

○[08/28 15:35] 学生 A

Any kind of music will do as long as it is played on a piano. という文「ピアノで演奏されているなら、どんな音楽でもよい」の as as の部分は、どのような意味や役割があるのかについて、教えて欲しいです。お願いします。

[08/28 18:58] 教員

as long as は一見、同等比較の表現に見えますが、「～である限りは」(=so long as)という意味の熟語です。

[08/28 21:43] 学生 A

分かりました。有難う御座います。

○[08/31 14:31] 学生 A

大変お世話になっております。英語の長文に触れたいです。ですが、本を買うのもあれだと思うので、オススメの海外のサイトなどは無いでしょうか。

[08/31 17:19] 教員

・The Mainichi の概要【特徴】日本語版にすぐ切り替えられる【レベル】初心者におすすめ【スマホアプリ】○

・The Japan Times の概要【特徴】日本のニュースを英語で読める【レベル】難しい言葉もすこし出てくるため、中級者向け【スマホアプリ】○

・BBC Learning English の概要【特徴】英語学習者向けのコンテンツが豊富【レベル】初心者におすすめ【スマホアプリ】○ 上二つが英字新聞です。

[08/31 18:20] 学生 A

ご丁寧に有難う御座います。コツコツ頑張ります。

○[09/02 12:19] 学生 D

質問です。「The product is easy to use.」この英文は成立しますか。

[09/02 12:35] 教員

成立します。It is easy to use the product. (その製品を使いのは簡単だ) の use の目的語が主語に繰り上がった形です。日本語訳は、「その製品は使うのが簡単だ」となります。

[09/02 12:37] 学生 D

ありがとうございます。

○[09/04 8:04] 学生 A

大変お世話になっております。take into account, take into consideration は、“…を考慮に入れる”という意味で使う時、ニュアンス的な違いでもあるのでしょうか。また、英訳する問題が出た時に、“愚かな”という言葉があったら“foolish”と“stupid”で迷うのですが、判断基準はありますか。

[09/04 9:34] 教員

1つ目ですが、native speaker の中でも、interchangeable (同意語：同じように使える) と考える人と、前者は、何かを決定する際に (take A into account : A の factor を考慮しなさい) に用い、後者は、A = request/offer)の場合に主に使われると区別する人がいるようです。2つ目ですが、[foolish, stupid]で検索するといろいろな説明がヒットしますので、調べてみてください (違いはあります)。したがって、英訳の際は、文脈を考慮することが必要になります。かの有名な、スティブ・ジョブズの言葉に "Stay hungry. Stay foolish." がありますが、ここでは、Stay stupid.だとジョブズの真意は伝わりませんね。

[09/04 9:54] 学生 A

調べてみます。

○[10/02 16:41] 学生 A

大変お世話になっております。Grammar and Expression の前置詞+関係代名詞で、上の文 (画像 : (The boiling point is) [the temperature at which a liquid substance changes into gas].) の which は目的格の which だと思っています。な

ので、目的格の which を、省略して at だけ置くことは不可能なのでしょうか。

[10/02 18:50] 教員

at が関係代名詞の前に置かれている場合は省略できません。at が前置されず、gas の後に置かれている場合は省略可能です。なぜなら、at だけが残ると、そのあとには、名詞または動名詞を置かないといけなくなり、S+V の節（この場合、which は目的格の which）を置けなくなるからです。

[10/02 20:13] 学生 A

文の構造上、おかしな事になってしまいますね。すみません。理解しました。

○[10/30 11:29] 学生 A

[・の個所はスクリーンショット]

・ Expression

・日本語の意味に合うように、() 内に適切な語を書き入れなさい。

・この地域では冬でもめったに雪は降らない。

・ It (x seldom ○hardly) snows in this area in winter.

こんにちは 大変お世話になっております。seldom や、rarely が適切ではないのでしょうか。

[2021/10/30 12:40] 教員

○seldom、rarely : 頻度 (めったに~ない)

○scarcely、hardly : 程度 (ほとんど~ない)

⇒文中での位置は not と同じ!

※seldom と scarcely に比べ rarely と hardly の方が口語的

○hardly any A、scarcely any A :

程度 (ほとんど A がない)

○hardly ever、scarcely ever :

頻度 (めったにない)

⇒文中での位置は not と同じ!

日本語の文脈から考えて (日本語の「めったに~ない」からも)、【頻度】を表していると考えられるので、君の指摘が正しいですね。但し、snows の前に ever があれば、hardly、scarcely が正解になります (東大・京大レベル)。

[10/30 12:42] 学生 A

有難うございます。seldom で丸にしておきます。

○[10/30 15:16] 学生 B

発音で疑問だったのですが、→[a water]の a はなぜアではなくてエイと言うのでしょうか。見分け方を教えて頂ければ幸いです。よろしくおねがいします。

[10/31 16:23] 教員

アメリカ式の発音はア、イギリス式の発音はエイです。吹き込んでいるネイティブがイギリス人で、エイと発音している可能性があります。アの発音でもエイの発音でもどちらも間違いではありません。

[10/30 16:35] 学生 B

国によるということですね。良くわかりました。ありがとうございます!!

4. あとがき

本稿では、本年度4月から10月末にかけて実施した Teams を活用した学級経営および教科指導の実践例を報告した。学級経営に関しては、学校行事に関する作文の提出、保護者懇談会(三者面談)における有効性について論じた。教科指導に関しては、授業で使用した資料を同日に Teams {投稿}に PDF ファイル形式でアップロードすることで自学自習を促すことができること(アンケートの結果を参照のこと)、Teams のチャット機能を用いて、質疑応答ができる状況を作ることによって勉学意欲の向上を図ることができる可能性があることを論じた。

実践報告を通して、遠隔授業ツール以外の分野における Teams 使用の有効性の一端を示せたように思うが、今後とも、Teams の有効な活用法を模索していきたい。

参考文献

東 弘子(2021)『Microsoft Teams 目指せ達人 基本&活用術』、マイナビ出版。

草原和博・吉田成章(2021)『「コロナ」から学校教育をリデザインする 公教育としての学校を捉える視点』(オンデマンド版)、溪水社。

森 貞(2013)「クラス文集作成を通じた学級指導とその教育効果について」『高専フォーラム発表原稿集』。

【付録 1】

「F3」の意味

F3クラス担任 森 貞

F3クラス担任、「き」が3本の「もり」です。福井高専入学おめでとう。君たちの入学にあたり、「3本立ての法則」一人に何かを伝えたいときに3本立てで話をすると、聞いている側の記憶に残りやすいという法則一に則って、充実した高専生活を送るための大事なお話をします。

君たちは、「F3」のFって何だと思いますか？君たちの多くが、「そりゃ、1年生(First-year)のFでしょ」と思っているのではないのでしょうか？当然、そういう捉え方もあるでしょうが、私は、『基礎作り(Fundamental)』のFとしたいと思います。つまり、この1年間は、君たちが以下の3点の基礎作りをする時期と捉えてほしいのです。

- ①授業、試験、レポート提出に係る学習習慣
- ②新たな環境に適応した生活習慣
- ③良好な人間関係の構築

詳しくは、入学後のホームルーム等でお話したいと思います。最後に、上記の基礎作りを成し遂げるためには、以下の3つの「き」が大切であることもお忘れなく！！(入試説明会ならびに卒業生の結婚式でのスピーチの「ねた」の1つです)

- ①「げんき」(元気)、②「ゆうき」(勇氣)、③「こんき」(根気)。

それでは、1年間、よろしくお祈りします。

(『青武台だより』No. 225 [令和3年4月1日発行] 掲載原稿)

【付録 2-2】

君に課したものである。国語科教員は、提出された課題を丁寧に読み込み、「読み物」として『青樹』への掲載が可能と判断した作品を校友会誌編集委員会事務局に送付する。これがいわゆる第1次選考である。この第1次選考であがってきた作品を、校友会誌編集委員会メンバーが回読し、最終的に、掲載作品を決定する(第2次選考)。

今年度は、国語科の先生方をお願いをして、例年、手書き原稿での提出であった課題を電子文書ファイルで提出するように学生に周知いただいた。校友会誌編集委員会では、これまで、第1次選考を通過した手書き原稿を、ほぼ均等な数で分けて、5つにグループ分けされた編集委員の代表者に配り、グループ内で回覧する形で回読作業が行われていた。この方法では、ひとりひとりがじっくりと原稿を読む時間が確保できない(電子文書ファイルであれば、USBメモリースティックを用いて編集委員に配布可能となる)ことや、印刷所に手書き原稿を渡しているため、(判読が難しい文字が含まれているせいか)活字原稿に間違いがあり、その訂正作業(校正)に時間がかかるといったことが以前より指摘されていた。そこで、編集作業の改善の観点から電子文書ファイルでの提出をお願いした次第である。ご協力いただいた国語科の先生方並びに学生諸君には心よりお礼申し上げます。

第2次選考では、A、B、Cの判定基準で評価がなされ、Cの判定がついたものについては、協議の上、最終的には編集委員長がその掲載の可否を決定する。毎年、数は少ないものの、C判定がつく作品がある。「読み物」としては面白いが、一部の表現や内容が『青樹』という公的な刊行物への掲載にはそぐわないという理由で掲載不可にせざるを得ない場合もある。そうであれば、該当の表現や内容を削除して掲載すればよいではないかという声も聞こえてきそうであるが、その該当の表現や内容があつてこそその作品であるため、話はそう簡単ではない。

『歌える翻訳コンテスト』の審査では感じたことのない葛藤が、『青樹』の編集作業(掲載作品の決定)には確かにあつた。責任の重い仕事であると感じている。

(福井高専校友会誌『青樹』第51号
令和2年2月12日発行 巻頭言 掲載原稿)

【付録 2-1】

『青樹』掲載作品の選考について

図書館長 森 貞

私は「洋楽」が好きで、授業でも、リスニング演習として、歌詞の聞き取りを取り入れている。私が、「洋楽」を用いた英語の勉強に興味を持つきっかけになったのは、ブラームスの「大学祝典序曲」が冒頭に流れる『旺文社大学受験ラジオ講座』(30分の講義が2講義分放送される1時間のラジオ番組 [1952放送開始～1995放送終了])において、松山正男講師が担当していた「英語の歌を通して英語を覚える」という講座を聞くようになってからである。英語に関しては、英文解釈、英作文、英文法の講座も開講されており、高校3年生の受験生としては、こちらの講座をしっかり受講すべきであったが、毎回欠かさず受講したのは、松山講師の講座だけであった。

その「洋楽」好きが高じて、6年前から、校内で『歌える翻訳コンテスト』を開催している。「歌える翻訳」とは、英語の歌詞を原曲のメロディに乗せて歌えるように日本語に翻訳した歌詞のことを指す。応募に際しては、日本語歌詞を書き込んだ電子文書ファイルと日本語歌詞を吹き込んだ電子音声ファイルの2つを提出してもらい、審査員(教員6名で構成)は、日本語歌詞を見ながら音声聞いて審査を行うことになる。作品募集の案内文書には、「歌える翻訳」を作る上で大切な点は、英語の歌詞が持つ情感やイメージを維持しつつ、大胆かつ柔軟な発想力を駆使して、メロディに乗る日本語の語彙を選択することである旨を明記し、そのような観点から、審査員は応募作品を審査する。第2回コンテスト以降は、「歌える翻訳」を審査委員長が教科を担当するクラスの夏季課題としたことで審査対象作品が大幅に増えたために、現在は、審査委員長による第1次審査と審査委員5名による第2次審査を経たのちに入賞作品を決定することになっている。

ところで、『青樹』に掲載される作品も、2回の選考を経て、その掲載が決定されていることはご存知であろうか。『青樹』に掲載される作品のほとんどは、元々は、国語科が夏季休暇の課題として学生諸

【付録 3-1】

水曜日の男

図書館長 森 貞

図書館事務室のテレビで、NHKの連続テレビ小説『エール』を見ながら、愛妻弁当(ランチ)を食べる。これが今年度に入ってから私の昼休みの過ごし方です。いっしょにランチをする職員の方たちとはいるん話をしていきます。

『エール』の主人公(古山裕一)のモデルとなった古閑裕而(福井高専校歌の作曲者)は、『六甲おろし』(阪神タイガースの応援歌)も作曲してるんですよ。だから、校歌の歌詞を『六甲おろし』のメロディーで歌えるんですよ(実は、『闘魂込めて』(読売ジャイアンツの応援歌)や『青雲(あおぐも)たかく』(中日ドラゴンズの応援歌)とともに古閑裕而作曲一もそのメロディーで校歌が歌えます)。新入生オリエンテーションで1年生全員を対象に校歌指導してあるんですよ、クラス担任した時なんかは、ラッパ片手に、校歌指導するんですよ。で、高専のメロディーで一通り歌わせた後に、余興として『六甲おろし』のメロディーで歌ってみせるんですよ。そうすると、解散後に、何人もの新入生から、『「六甲おろし」のメロディーしか頭に残ってません』って言われるんですよ。あと、体育祭とか卒業式では、吹奏楽部で校歌演奏するんですけど、私なんか、こっそり、六甲おろしのメロディー吹くんですよ(うまくハモります)。でも、耳の良い先生なんかには分かるようで、『森さん、六甲おろし、吹いてたやろ』って言われるんですよ。

「1985(昭和60)年10月16日に阪神タイガースがセ・リーグ優勝した時、大阪ミナミにいて(宗右衛門町にある八百屋の娘さん(高校生)の家庭教師をしてました)、道頓堀川に飛び込む人たちを見て、『飛び込みたいな』って思ったんですけど、『ずぶぬれで、地下鉄御堂筋線と阪急宝塚線には乗れんな』って思って断念しました。」

「夜、うちで、ご飯食べてたら、県外の大学に行ってる息子から、『バイトに行く途中、部屋の鍵なくした。マスターキー(アパート名が入っており、建物入り口の鍵も兼ねたもの)なんやけど。』って電話あつたんですよ。んで、車飛ばして、息子のところまで行って、アパートからバイト先までの道を、懐中電灯片手に、徒歩で往復2時間かけて探したんですけど、見つからなかつたんですよ。これはすごい出費になるなあと思って思ったんですけど、『もう一回バイト先行ってみるわ』ってバイト先に行った息子から『休憩室のソファの隙間にあつた』って電話あつたときは、安心したのかはわかりませんが、急に足が痛くなりましたわ。」

【付録 3-2】

「『青樹』の掲載推薦原稿のこの部分はNGワードが使われているので、一応保留にして、校友会誌編集委員の先生方にご意見を伺ってみましょう。掲載不可ってなったら、『裏青樹』に回すということ。」

ここでは、紙面の都合上、ほんの一部しか紹介できませんが、業務のこと（コロナ禍における図書館運営やブックハンティングの実施方法、校友会誌『青樹』の回読スケジュールの調整等）や家族のこと、最近笑えた話など、時には、食後のデザートを食べながら、いろんな話をしています（昨年、ソーシャル・ディスタンスが叫ばれていますが、心の距離は相当に縮まっていると思うのは私だけではないと信じています）。

もともとは、新型コロナ禍でリモート授業が続き、人恋しくなっていた私が、職員の方たちにお願ひして、ランチを一緒にさせていただくことになったのですが、今では、「今日はどんな話をしようかな」、「どんな話が聞けるかな」と、この時間が待ち遠しくて仕方がありません。

今では、毎日の日課となっていますが、当初は、(職員の方たちに対して遠慮する気持ちが強かったのか)毎週水曜日だけの楽しみでした。ある日、毎週水曜日にだけ図書館事務室に用事で来られる生命保険会社の方(いわゆる生保レディー)に「毎日来られているんですか?」と聞かれたことがありました。事務職員の方(7月に県内の高等教育機関に異動されました)この職員の方には、1年半に渡り、公私ともにたいへんお世話になりましたが、すかさず、「いいえ、水曜日にだけ来られているんですよ。」とお答えになりました。その時以来、私は、その生保レディーの方から「水曜日の男」と呼ばれています(毎日、来ているということはいまだに内緒です)。

新型コロナ禍でたいへんな時代となっていますが、私はこうしてささやかな楽しみを見つけています。本号の特集は『新型コロナ禍との向き合い方』です。力作が揃っております。是非、ご一読いただき、これらをヒントに、皆さんの『新型コロナ禍との向き合い方』を見つけて下さい。

(福井高専校友会誌『青樹』第52号
令和3年2月16日発行 巻頭言 掲載原稿)

【付録 5】

2021/04/20

F3のASHIATO
—新入生オリエンテーション研修編—

【昼食】(お弁当屋さん)
のり弁当、白身魚フライ、からあげ、ウインナーソーセージ(?)、スパゲッティ、etc.

【マイクロディベート】(クラスワーク)
*マイクロディベートとは簡易版ディベートであり、構成は以下のとおり。

①肯定側主張(3分)
②否定側主張(3分)
③フリートーク(バトル)(3分)
④判定(オーディエンスの挙手の多い方が勝者)・講評(担任or担任補佐)(3分)

○チーム分け: い組(01~08)、ろ組(09~16)、は組(17~24)、に組(25~36)、ほ組(37~42)
・い~に組【肯定側4名、否定側4名】、ほ組【肯定側5名、否定側5名】
(肯定・否定は、試合直前に、「こ」「ひ」と書かれている紙を引いて決定)

論題:
1. F3の担任は(義輪先生よりも)森先生の方が適任である。(B科芹川先生提供)
(当初の論題は、「映画ドラえもん」の主演は野比のび太である。(過去の『校内弁論大会』)一実施はディベート大会の論題、担任が肯定側ディベーターとして参戦)であったが、2日前の特活の時間のマイクロディベート説明時に、口をすべらせて、最強の論者(弁論大会での勝因)一原作者の藤子F不二雄が「ドラえもん」の主人公は野比のび太で」と対談で語っていたという事実を披露してしまったために(その瞬間、クラスの学生ほぼ全員から「あつ」という声が上がりました。結果、ボツになりました。トホホ)

2. ドラえもんが持っている道具の中では、「どこでもドア」が最強である。(過去の弁論大会の論題)

3. 授業は、黒板よりもホワイトボードの方が適している。(過去の弁論大会の論題)
(これも、担任が肯定側ディベーターとして参戦した時の論題。その時の取因が、「白いものを汚(けが)す快感は何ものにも代えがたい」と主張したことであることを告げた時の女子学生全員の冷たい視線は今思い出しても『冷や汗もの』です。ナハハ)

4. 自動翻訳機(ポケトーク)を持っていれば、英語の授業は不要である。(義輪先生提供)

5. 朝食には、コーンフレークが最適である。(義輪先生提供)

【ドッジボール】(球技大会)
試合結果:
Aチーム(01~10) 3勝0敗
Bチーム(11~20) 3勝0敗
Cチーム(21~31) 2勝1敗
Dチーム(32~42) 3勝0敗

【付録 4】

『青樹』巻頭言クイズ

出席番号	氏名	
------	----	--

1 森先生の同級生の俵万智さんは数学特別クラスで森先生のいくつ後ろの席で授業を受けていたか?
① 2つ後 ②3つ後 ③4つ後

2阪神が優勝した時、森先生はこの川に飛び込もうとして断念したか?
①淀川 ②道頓堀川 ③堀川

3森先生はだれのラジオ講座(大学受験ラジオ講座)を好んで聞いていたか?
①青山先生 ②松山先生 ③梶山先生

4歌える翻訳コンテストの審査員は何名か?
①4名 ②5名 ③6名

5森先生が、息子がなくなったアパートの鍵を探しまわった時間はどれだけ?
①1時間 ②2時間 ③3時間

6森先生が下宿先から大阪ミナミのバイト先に行くのに利用した地下鉄はどれ?
①御堂筋線 ②堺筋線 ③今里筋線

7「水曜日の男」と命名したのは誰?
①図書館事務職員 ②生保レディー ③校友会誌編集委員の先生

8森先生の息子はアパートの鍵をどこで見つけたか?
①休憩室のソファの隙間 ②休憩室のローカーの隙間 ③休憩室のソファの下

9中日ドラゴンズの応援歌はどれ?
①闘魂込めて ②六甲おろし ③青雲たかく

10『大学祝典序曲』は誰の作曲か?
①ベートーベン ②ブラームス ③チャイコフスキー

得点 /10

【付録 6】

2021/07/15発行

2021年度F3のASHIATO 第2号

『はじめての定期試験』

【今回は校正等、一切行っていない。】

F3ホームルーム (2021/07/15)
目次

1. 「はじめての定期試験」の作文について
2. 前期中間試験成績表(個人)の配布
3. 作文作成

1. 「はじめての定期試験」の作文について
文字数: 400文字以上(足りない場合は再提出)
提出方法: teamsのチャット(担任宛)
提出期限: 7月15日15:35(H.R.終了時)
(1)ユニークなタイトル
(2)出席番号
(3)氏名 を本文の最初に必ずつけること。

2. 前期中間試験成績表(個人)の配布
・保護者に見せて、感想を書いてもらうこと(単に、「見ました」だけではダメ)。
・保護者の感想を記入した成績表を明日(7月16日)の朝(1限目の始業前)もしくは昼休み中に各自、森教員室(教員室7)に持参すること。
・寮生は、成績表のスクリーンショットを保護者に送り、感想を担任のメールアドレス宛送付するように連絡すること(提出期限は7月16日13:00)。

○未提出の学生は、担任から直接保護者に成績を伝えます。

3. 作文作成
・文集にして、teamsにUPされることを念頭に作成すること(F3学生、F3教科担当等が閲覧可)。
・送信する前に、表現(てにをは、漢字)および内容をしっかり確認すること。
○ノート等に下書きをすると良い。

【付録 7】

2021/09/21

2021年度 F3のASHIATO 第3号
— 「夏休みのおもひで」 編—

- 夏休みの目標
箇条書きで提出すること。
提出方法：teamsのチャット（担任宛）
提出期限：8月15日 23:59

○担任の目標（目標は夏季休暇前（8月12日）のL.H.R.で学生に披露済み）

- 後期の授業の準備（試験問題作成を含む）をcompleteする。○でした。
- バンド（モーリーズ）でする曲のドラム譜を暗譜する。△でした。
- 「みてね」に毎日アップされる県外在住の二人の孫（生後5か月・生後3か月）の写真・動画に、こまめにコメントを入れる。◎でした。
（注）「みてね」とは？
家族アルバム みてね（かぞくあるぼむ みてね）は、株式会社ミクシィが2015年4月13日より提供を開始した家族向け写真・動画共有サービス。iOS版とAndroid版のスマートフォンアプリが提供されている。同社取締役会会長の笠原健治が企画・開発しており、主にスマートフォンで撮影した子どもの写真を、夫婦間や家族間といった限定した範囲で、見せたい相手だけに共有しコミュニケーションをはかることを目的としている。（Wikipediaより引用）
- 育毛にハゲみ、髪の毛をふさふさにする（アデランス等の人工増毛には頼らない）。××でした。

○担任補佐の目標（同上）

- 英文の論文を1本仕上げ上げる。→△
- バンドの練習以外にも歌の練習をする。→◎
- 大人の事情によりやむなく削除（個別問い合わせ可）。→×

- 作文
文字数：600文字以上（足りない場合は再提出）
提出方法：teamsのチャット（担任宛）
提出期限：9月17日23:59（9月13日から受け付け開始）
（1）ユニークなタイトル
（2）出席番号
（3）氏名
を本文の最初に必ずつけること。

【付録 9】

2021/10/19

2021年度F3のASHIATO第5号
— 「弁論大会・高専祭」 編—

○弁論大会
開催日：10月15日（金）【担任・担任補佐関連分のみ記載】（敬称略）
10:50 試合開始(第三試合) 教員（森&養輪&芹川）チーム vs 3Ei
『「肩幅の広さ」などの体格の良さと、発言の説得力との間には相関関係がある。』
役割分担：○否定側立論：芹川
引用箇所担当：歌唱 森、ギター演奏 養輪
歌詞「肩幅が広い人のほうが 肩幅が狭い人よりも 発言に説得力が増す 肩幅が広い人のほうが 肩幅が狭い人よりも みんなから支持される」
（『肩have a good day』（ヤバいTシャツ屋さん））
○質疑応答：森
○否定側反駁：養輪

*チーム名：「圭さんと愉快的仲間たち」
「ヤバT」ロゴ入り（黄色字入れ 4B田中ころさん）の黒Tシャツ（ユニクロで3枚1500円で購入）を着て参戦。12対9で勝利してしまう。対戦後、「大人げない」と非難の嵐があったとか、なかったとか。「ヤバT」を「ヤバいTeacher」と捉えていた人、多数（まあ、少なくとも、担任が【ヤバT】であることは間違いない!!）。

○高専祭
開催日：10月16日（土）・17日（日）【担任・担任補佐関連分のみ記載】
10月16日 13:00～14:00
〔吹奏楽演奏会〕（森はTp.で出演）
演奏曲：・ようこそジャバリアパークへ
・イン・ザ・ムード（Tpソロをとる）
・PIRATES OF THE CARIBBEAN
・三原色
・怪物
・廻廻奇譚
・Cry Baby
・宝島（アンコール）

10月17日 15:00～15:30
〔MMCライブ〕
「モーリーズ」（Vocal&アコギ：養輪、Guitar 1：忠住(4B)、Guitar 2：室田(2B)、Piano：三輪（非常勤）、Bass：高橋（M科教員）Drums：森）
演奏曲：365日（Piano：山脇（C科教員））
彩り
HIMAWARI
ハル
Innocent World

（受付日 2021年11月11日）

（受理日 2022年1月21日）

【付録 8】

2021/09/28
2021年度F3のASHIATO 第4号
— 「体育祭」 編—

福井工業高等専門学校第56回体育祭（令和3年9月28日（火）開催）

戦績

- 第1学年全員リレー（9:40開始）
前半組(21名) 第2位
後半組(21名) 第1位
- 色別対抗リレー（11:25開始）
F3から2名出場 第5位

高専におけるグローバル人材育成についての一考察 —英語教育の視点から—

宮本 友紀*1

The Meaning of “Developing Global Human Resources” in the context of Kosen — Perspectives from EFL Teachers —

Yuki MIYAMOTO

For the past few decades, it has been widely believed that the expansion of economic globalization increases the need for "global human resources" which enable companies to survive the stiff competition in global markets. Therefore, it now seems critical for Kosen to train "global engineers" in school in order to provide the companies that are expanding overseas with well-trained human resources. Focusing on these recent issues, this study examines the manner and extent to which "global" discourses are influenced and contextualized by social, economic, commercial, and political matters in Japan. It further explores the implications of the findings for teaching Kosen students in EFL classrooms.

Keywords : Global Human Resources, Education Policy, World Englishes

1. はじめに

「これから社会や経済はさらにグローバル化する。今後活躍できる人材は国際共通語である英語を使えることが必須である。」という言説については、教育、財界、あるいは国の教育政策など様々な領域で盛んに言及されている。コロナウイルスの影響で昨今の勢いは減速した様子ではあるものの、それはもはや誰もが当然と考える社会通念となっているようである。本稿はこのグローバルを取り巻く言説を検討し、一連の議論を踏まえ最終的に高専における英語授業でどのようなことができるのか提言することを目的とする。

2. グローバルという言説

2・1 グローバル言説を取り巻く様相

昨今のグローバル化の言説を見直すに当たって、英語教育を取り巻く社会、経済あるいは政治的コンテキストについて考える必要がある。残念ながら現実には純粋に教育を最優先でという理想は難しい。結局英語教育もまた、とりわけその教育政策においては教育分野以外の影響、経済界・産

業界あるいは国の政治外交などの影響を想像以上に受けているという事実に対しては、常に意識的・批判的でなければならないと筆者は考える。

例えば、外国人の語学指導助手を全国の自治体に派遣する JET プログラム (Japan Exchange and Teaching Programme) は文科省、外務省および総務省の共同で行われている事業であるが、久保田(2018)によると「この事業の起案はきわめて政治色が強いトップダウン」だった。プログラムの始まった 1980 年代当時日米貿易摩擦のため広がりつつあった「ジャパン・バッシング」への対策の一つとして、主として米国の若者を日本が全費用負担で雇い入れ、日本の各自治体で草の根的に交流を進めることで日本への印象を向上させていく狙いであった。そのため教育重視というよりもこのプログラムを通して参加者が「日本語や日本の文化、習慣などの多くのことを学ぶ機会があり、それを母国で伝える」ことが期待されると応募希望者向けのホームページに明記されている。ALT の選考は外務省の業務であり、応募者の学士号の専攻は問わず教育の学位や教員免許または TESOL/TEFL の資格の所持は選考過程において考慮はされるが必須条件ではないことも強調されている。政治外

*一般科目教室 1miyamoto@fukui.kosen-ac.jp

交的には将来国の意思決定を担うポジションを務める可能性の高い高学歴の若者をというのが本音なのかもしれない。現場としては教育を専門とした人材が理想なのだろうが、これは教育的というより政治的思惑が優先されたゆえの双方の落とし所といったところであろう。

英語教育産業や商業メディアの影響についても言及しておきたい。英会話業界、出版メディア関係、講師派遣業、非営利団体含む英語の民間テスト業者などはグローバル人材の需要から高まっている昨今の英語ブームに沸いている。これからグローバル人材が求められる、すなわち国際共通語としての英語ができなければならないというのは彼らにとって大きなビジネスチャンスである。幼児英語教育にしろキャリアアップのための英会話や資格取得にしろ、久保田(2018)はその背景として新自由主義的な不安定な労働環境下での「自己責任としての生涯学習」の必要性に対する不安や焦りがあると指摘している。たとえばいわゆる資格ビジネスのように、実際には不安を解消するための消費行動であるにもかかわらず将来のキャリアのための投資行動であるかのように偽られている。しかしたとえ TOEIC で高得点を獲得してもそれは海外業務の職を得ることや職場でのキャリアアップを約束するものではない。実際寺澤(2016)では英語力と経済的成功は関連がないこと、また幼少からの外国語学習に効果があるという裏付けはないと結論している。それでもメディアなどを通したミスリードは巧妙である。英語教育産業に対して学習者は賢明な消費者として慎重に行動すべきである。

政治的あるいは商業的な思惑が存在する一方、財界や企業からの英語教育への要望も経済のグローバル化を受けてより大きな影響力を持つようになってきている。少子高齢化や人口の減少によりこれ以上国内市場に期待できず国外の市場を開拓維持するためには国際競争の激化を生き抜かなければならない。その意味で経済や産業のグローバル化は財界だけでなく国にとっても切実な課題である。にもかかわらず現在海外進出企業がその競争を勝ち抜くためのグローバル人材が圧倒的に不足しているという問題がある。実際総務省がまとめた「グローバル人材育成の推進に関する政策評価書」(2016)の海外進出企業に対する調査によれば約7割の企業で海外事業に必要な人材が不足していると回答している。そのような背景からグローバル人材育成の

ための国の教育政策には経団連や財界からの要望が色濃く反映されており、久保田(2018)はそれを「個人と国家の経済的成功のための英語教育施策」あるいは「新自由主義経済における国家教育としての英語教育」としている。高専という教育の枠組みから考察する前にこれらの議論についてまず整理していきたい。

2・2 グローバル人材の需要と供給

ここでは前節で引用した総務省の「グローバル人材育成の推進に関する政策評価書」(2016)についてももう少し見ていく。まずこの文書の位置づけとしては、文科省の第2期教育振興基本計画に含まれるグローバル人材育成の推進に関する政策について総務省の評価と勧告であり、曰く「企業が海外展開を進める中でグローバル人材の確保が依然として大きな経営課題とされているなど、グローバル人材育成の進捗が懸念される状況」であるとして、2期を継いで策定される第3期教育振興基本計画にて対策改善を求めるものである。つまり、依然として海外進出企業ではグローバル人材が不足しており、グローバル人材育成側としての教育とグローバル人材を必要としている企業との需要と供給の間に深刻な「ミスマッチ」が起きていることが訴えられている。さらにそのニーズを探るために評価書では「グローバル人材の確保状況に関する企業の意識調査」を行っており、グローバル人材の主要な需要者である海外進出企業4,932社(東洋経済新報社の「海外進出企業総覧会社別編 2015 年刊」に載っている全ての海外進出企業)のうち980社から有効回答数を得て実際のグローバル人材の確保状況や要望等についての結果がまとめられている。英語教育に関わる内容としては企業からの「グローバル人材」の育成のため高等教育機関への要望が調査結果に含まれている。具体的には「海外留学の促進」、「異文化理解に関する授業の拡充」、「ディベート等の対話型の授業の拡充」、「英語授業の拡充」、「外国人留学生・教員の受入れによる学内国際化」など海外留学や語学力に関するものに限らず、異文化理解やディベートに関するものなど様々である。特に留学に関しては「異文化理解力や海外赴任にも耐え得る経験を積むには留学が最も適当」「語学力の習得のみならず、現地の国民性や異文化理解、国際的な視野拡大を図るためには最低でも1年の留学期間が必要」等コメントに見られるように中長期間の留学を理

想とする企業が多くあった。

実際に文科省が官民協働海外留学支援制度として 2014 年に開始した「トビタテ！留学 JAPAN」もその需要にこたえる人材を育成・供給するための留学プロジェクトと言える。応募書類も面接試験も原則日本語であり通常この手の公募は英語資格試験の点数で一定以上の成績が応募条件になるところをトビタテは応募者の英語力で落とすことはない。それよりも自分でしっかり留学計画を立ててそれを（たとえ日本語であっても）応募書類や面接試験で上手くプレゼンテーションすることが求められる。また、参加者は日本のアンバサダー（大使）として海外滞在中は日本の良さを日本人として発信すること、また帰国後はエヴァンジェリスト（伝道師）として日本で海外や留学の魅力を経験者として伝えること、という発信者としての役割が求められる。これらをまとめると、ただ単に語学に堪能な人材を求めているのではなく、語学をツールとして活用しつつ積極的に海外と関わり発信し計画プロジェクトをこなしていく人物像が期待されているのが伺われる。その意味でトビタテは海外進出企業からのグローバル人材育成の要求を反映した新しい形の留学プログラムと捉えることができるだろう。

2・3 高専とグローバル人材育成

グローバル化の流れは高専においても例外ではなく、専攻学科にかかわらず海外の市場や企業相手にビジネスを展開している海外進出企業に実際に就職する可能性は高専生にとって高いのではないかと推測される。多くの製造業に携わる企業は営業所、工場など海外拠点を展開しており将来彼らがそのいずれかに駐在することもおおいにありうる。前述の寺澤(2016)では仕事で英語を使う人々は通常考えられているよりずっと少ないと結論するものの、例外的に技術系の専門職についてはまだ比較的英語を使うことが多いとしている。さらにその場合日本本社では分業で担当することが通常である一方海外事業所は少人数運営であることが多いため多種多様な仕事全般をこなす際英語や現地語を使う機会が必然的に多くなることも指摘している。仕事や経済的成功には英語が必須というのは大抵が実際以上に誇張されていると引き算をして見るとしてもやはり高専生にとっては将来的には他の日本人の学習者よりも英語が重要になってくることは否定しがたいようである。 マイクロソ

フト日本法人の代表取締役だった成毛(2011)はその著書で日本人の9割は仕事で英語は必要ないと言い切ったが、高専生は該当しない残り1割になりうるという想定で授業もなされるべきなのかもしれない。

それを受けてか高専の国際化を語る際に「グローバルエンジニア」という語を聞くようになった。本校で実施されているオーストラリア研修旅行についても「グローバルエンジニアになるための研修旅行」と銘打たれている。先ほどの第2期教育振興基本計画においてはグローバル人材とは「日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて様々な分野で活躍できる人材」と定義されていた。それに倣えば「グローバルエンジニア」とは、「日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて」ものづくりの分野で活躍できる人材とでも言えるのかもしれない。

3. グローバル人材と英語教育

3・1 グローバル人材の語学力とは

それではそのようなグローバル人材育成を想定するとして語学力を含めどのようなスキルが求められているか。まず大前提としてそこで使われる英語はノンネイティブ同士のコミュニケーションとなる機会が多くを占めることが想定される。そこで話される英語はネイティブを基準とする標準英語ではない世界英語 (World Englishes) や ELF (English as Lingua Franca) とよばれるところのものであろう。世界英語では標準英語を倣うこと、あるいはネイティブスピーカーが理想のお手本となるのではなく、英語はコミュニケーションのツールであることが最も尊重される。お手本をどこに設定するのかというのは実際学ぶ側にとっては無意識あるいは意識的な目標設定として重要であり、デフォルトで目標がネイティブスピーカーに設定されたままであると世界英語を学んだり使用したりする際齟齬が生じる可能性もある。教える側は常にその問題に対して繊細であるべきであろう。また、英語を母語としない留学生との積極的な日本語以外での交流を持つことも世界英語を

身につける意味で大いに意義のあることだろう。

一方で同時に、たとえ世界英語であっても英語だからどこでも通じるわけではないということも忘れてはならない。海外赴任の際の語学力については英語だけではなく現地語もまた必要である。久保田(2015)のタイ、中国および韓国の日系企業の現地スタッフおよび駐在員対象の調査および宮本・藤田(2017)のベトナム日系企業の調査では、いずれも職場で使用されている言語は仕事の種類によって英語よりも日本語あるいは現地語が使われる機会が想定外に多いと指摘している。これについて久保田(2015)はあるカスタマーサービス関係の技術職社員のコメントとして、実際に機械が動いている現場に近ければ近いほど現地言葉が必要になってくるように感じると述べている。以上を踏まえると、グローバル人材は英語使用に偏るのではなく臨機応変な語学力を操れる人物とも考えていいのかもしれない。

3・2 グローバル人材の語学力+ α とは

前述の総務省の「グローバル人材の確保状況に関する企業の意識調査」(2016)では海外進出企業からのグローバル人材育成のための大学教育への要望コメントも記載されているのだが、語学力を礎としつつも企業が望むグローバル人材にはその前提の上に様々な能力が期待されることが強調されているのが興味深い。その能力は異文化理解と異文化への柔軟な態度やタフさ、あるいはディベートなどに代表される(ある意味日本的ではない)自己プレゼンテーションや交渉能力、契約書など必要な情報を読む力など複合的・応用的な能力があげられ、実際に海外の現場で働いている生の声ならではの説得力を感じる。これらは本来重層的に語られる能力であり総括した途端に語りの豊かさを喪失してしまうこともあり、以下印象的なコメントを引用することで代替したい。

- ・単に外国語が堪能な者ではなく、外国語を駆使して自分の意見を発信できる者が求められており、この発信力を身に付けるためにはディベート等が有効である。
- ・グローバル人材は、日本語が通じない環境の中で、自分の意思をはっきりと主張しなければならぬ経験をしてきていることが必要である。
- ・日本人は、親切心もあるが、議論を避けて物事を決めるこ

とから、必要以上に業務を担ってしまう傾向がある。このことが、労働時間を増加させ、ワークライフバランスが崩れることにもつながっている。一方、アメリカのミドルクラス以上の大学では、ディベートとプレゼン形式の講義が主であり、熟議を重ねることによってお互いの信頼感が高まることもある。海外拠点において、議論や交渉をするにはプレゼンテーション力と発信力が必要であり、そのためには、日本の大学でも特にディベート等の対話型授業の拡充が必要である。

- ・グローバルに活躍していくためには英語等の語学力が必要であるが、単に英会話ができるだけではなく、技術的な専門用語を理解できる人材でなければ、発注する際などに海外企業等とうまくコミュニケーションが図れない。技術的な専門用語を、辞書等を使用せずに理解してほしいので、特に、工学部の学生は語学を勉強してほしい。また、仕事を行う上では、契約を交わすこともあるので、会話だけでなく、契約書を理解できるリーディング能力も伸ばしてほしい。
- ・英語が話せることと仕事ができることは異なるので、学生には語学力以外に海外進出企業が必要としている能力を身に付けさせてほしい。海外事業に必要な人材は、語学力がベースにあって、それに加えてマーケティングの能力など、語学力プラスアルファの能力がないといけない。海外の取引の習慣や企業のビジネスモデルなどを知っていれば入社後に役に立つと思うので、大学の講義に企業を呼んで企業の生の声を学生に聞いてもらうことが有効である
- ・技術分野のグローバル人材にとって重要なのは、語学よりも専門的な知識であり、海外拠点から求められるのは最先端の日本の技術と日本のマネジメント力である。伝達する中身である専門的な知識があって初めて伝達ツールとして語学力が必要になる。大学には、専門知識の教育を第一に考え、外国語はその伝達ツールとして教えてほしい。成績優秀者だけでなく全ての学生がコミュニケーションレベルの英語力を身に付けることが望ましい。
- ・海外で活躍するためには、主体性・積極性に関連した事柄として、まず、生活にタフであることが挙げられる。日本と生活習慣が異なる地において、生活面で順応できる必要がある。例えば、食事では、現地の食材、料理を食べられないと、現地の人からの信頼は得られない。さらに、海外で活躍するためには、現地への融和も必要であり、食事もそうであ

るが、外国では時間の流れ方も異なる。正に異文化理解の精神、尊敬の念も必要である。

・人から与えられるのではなく、自らの努力により、語学力やコミュニケーション能力を身に付け、異文化を理解した者でなければ、グローバル人材として海外で活躍することは困難である。

3・3 高専生を対象とした意識調査

では当事者である高専生のグローバル人材育成に対する意識はどうなっているのか、実際の需要にどれだけ沿っているのか、あるいは乖離があるのかを探るため簡単なアンケート調査を行った。筆者が担当する本校4年生1クラス43名(男子41名女子2名)の学生に対し授業前に時間を設け実施した。また事前に本稿でアンケート結果を匿名で使用することを説明したところ全員より使用許可の承諾を得た。

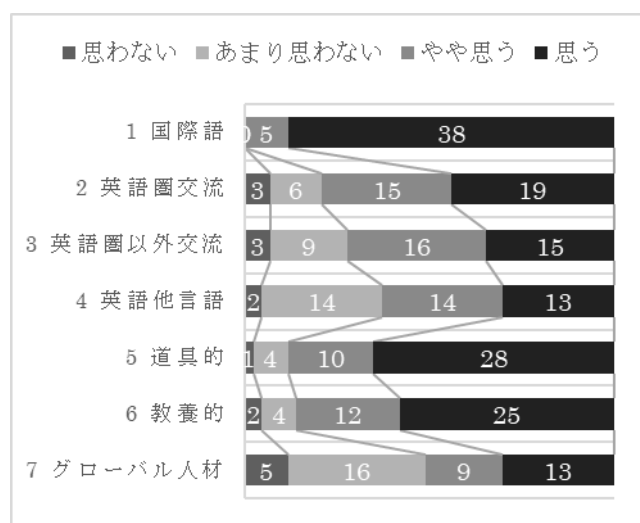


図1: 回答数の分布

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7
SD	0.32	0.91	0.91	0.89	0.75	0.83	1.02
avg.	3.03	3.25	3.12	2.93	3.37	3.5	2.69

表1:標準偏差と平均

まず設問1「英語は国際共通語である」という項目に対しては全員が「そう思う」(38名)「ややそう思う」(5名)と肯定的に回答した。英語がリングフランカであるという認識

は学生には浸透しているようである。また、対の設問である設問2「英語で外国の人(英語圏の人)と交流してみたい。」と設問3「英語で外国の人(英語圏以外の人)と交流してみたい。」の両項目の回答はやや英語圏の方が肯定的ではあるものの回答構成比や平均など全体として似た傾向を示しているのが興味深い。設問1の回答とあわせても、彼らにとって英語はいわゆる英語を母語とする内心円の国の人々だけではなくその他の世界中の人々も含めて交流する手段という意識があることが推測される。またさらに、設問5「就職や進学、将来の仕事のため英語ができるようになりたい。」と設問6「趣味や興味など楽しみのため英語ができるようになりたい。」の英語学習の動機について尋ねる設問についても、若干実用的動機が上回るものやはり似た傾向を示している。これについてはネットなどで海外との交流や情報が身近になり勉強以外の動機で英語ができることのメリットを現代の学生が感じる機会が増えたのかもしれないと筆者は推測するところであるが、実際にインタビュー等で確認してみたい興味を引く点である。設問4「英語以外の言語も話せたらいいなと思っている。」では「そう思う」(19名)「ややそう思う」(15名)と英語以外言語を学ぶことに意欲的な学生が比較的多くみられた。具体的にどの言語を学びたいかと併せて尋ねたところ(複数回答可)、ロシア語、韓国語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、中国語、フランス語、ポルトガル語など様々な言語があげられたが、特に中国語(6名)ロシア語(7名)ドイツ語(8名)に人気があった。設問7「将来グローバルな人材として活躍したい。」は「そう思う」(13名)「ややそう思う」(9名)あるいは「あまり思わない」(16名)「思わない」(5名)と肯定と否定がほぼ半々となり、最も回答が分かれた項目となった。英語は国際共通語であり将来の職務や趣味などにある程度必要であることは認めつつも、だからといって積極的に海外業務に関わりたいかというところは個人によってはっきりと意見が分かれるようである。

また、自由回答形式で TOEIC など資格試験の取得の他に英語の勉強で何が大事になるのか尋ねたところ、回答のあったほぼ全員がスピーキングを挙げていた。具体的コメントでは、「会話がしっかりできるための練習」「英語を話して意図を伝える練習」「実際に英語でコミュニケーションが取れないと意味がないと思う。だから英会話の方が大事

だと思う」「実践的な勉強が必要。現地で実際に会話する」「実用を考えるならスピーキング」「発音や文法が通じなくても伝わるまで伝える勇気」など話すことに関して上達したい、練習したいという意見が圧倒的に多かった。

結論として、あくまで1クラス分のアンケート結果ではあるものの、グローバル人材として積極的に働くかどうかは個人の温度差があるものの、傾向としては英語で交流する対象は英語圏に偏りがなくまた英語その他の言語を通じた他言語話者との交流にも肯定的であり、さらに実用と教養のどちらかではなくどちらも豊かにするため英語を身につけたいと考えている学生像が浮かび上がってくる。筆者自身の学生時代を考えると随分柔軟でグローバルな視野を備えた若者が育ってきているのだなという印象であり、企業の求めるグローバル人材像と彼らの目指す理想像とがそれほどかけ離れたものであると考えなくてもよいというひとつの示唆にはなるのかもしれない。

4. まとめと今後の展望

今までの流れを今一度まとめると、これからの社会経済はさらにグローバル化するので仕事で英語は必須であるという主張は一部の人に当てはまるのみであり、実際仕事で英語を使う人はそれほど多くはないようである。しかしその少数派に高専生は含まれる可能性が高い。ただし、そこで必要とされるグローバル人材というのはただ英語が流暢である社会人という素朴なイメージとはかなりかけ離れている。実際にはしっかりした専門知識を備えていることが大前提であり、加えて高いコミュニケーション力、異文化への柔軟性や耐性など様々に複合された能力をもつことが要求される。またそのグローバル人材が実際に用いる英語はノンネイティブ同士のコミュニケーションを多分に含むことを考えると世界英語や ELF により近いものであり、これも英米英語を標準とした従来の教え方ではずれや矛盾が生じてくることもあるだろう。

また、現地で働くためにはそもそも語学力だけでは不十分である。久保田(2015)は調査で様々な社員に行ったインタビューを代表するものとして語学はツールというコメントを取り上げている。つまり、仕事で最重要なのはやはり専門知識・専門技能であり、加えて偏見を持たずに文化の違う相手に接することができ、同時に自分の意思をきちんと伝

えることができることが望ましいという考えである。語学力はコミュニケーションの礎のひとつであるが、だからといって語学力は決して高いコミュニケーション力を保証するものではない。

これらを改めて考慮すると教育の現場は未だその需要に追いついていないし、アップデートされていない。例えば従来の英語の授業に加えて、なぜそれが必要なのかという背景やどのような英語力を自分は築いていきたいのかなどについて一度は授業内で機会を持つことも必要なのではないかと筆者は考える。その考えからまだ手探りの段階ではあるが、高学年を対象に英語を公用語にすることについて、あるいは英語教育に関わる誤解についてなどを議論しレポートにまとめる課題などの試みを始めている。これらの授業での取り組みはまだ始まったばかりであるが、将来的に一定期間後のまとまったデータが収集次第、授業レポートや履修者のインタビューなどの分析を行うことも今後の示唆を求めるうえで有益であると考えられる。

何のために英語を勉強するのか、という論争はグローバルという語がもてはやされるずっと前から根深いものであった。今回はグローバル化とそれを取り巻く言説に焦点をあてて英語学習について考えてきたが、そのような極めて実用的な側面だけではなく英語学習には教養的な素養を涵養する側面、あるいは学習を通して自律性を確立して側面など実用一辺倒ではない豊かな学びを擁していることを筆者は決して否定するものではないことを最後言及しておきたい。ただし、英語ができなければ徒に煽るのでも脅すのでもなく、あるいは英語教育を取り巻く様々な思惑に徒に振り回されることなく、学習者本人の人生や将来にとって英語の学びをどのように組み立てていくのか考える機会を提供することもまた、英語教育あるいは国際交流事業に関わる者として大切なのではないかと改めて考えるところである。

参考文献

- 久保田竜子(2015)「アジアにおける日系企業駐在員の言語選択 ―英語至上主義への疑問」『ことばと社会』十七号
久保田竜子(2018)『英語教育幻想』筑摩書房
寺沢拓敬(2016)『「日本人と英語」の社会学 ―なぜ英語教

育は誤解だらけなのか』研究社

総務省(2016)「グローバル人材育成の推進に関する政策評価書」https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/107317_00009.html

成毛眞(2011)『日本人の9割に英語はいらない』祥伝社

宮本友紀、藤田卓郎(2017)「多言語環境で働く技術者の英語力に関するニーズ分析」福井工業高等専門学校研究紀要第51号

(受付日 2021年11月12日)

(受理日 2022年 1月21日)

高専の社会科学科目における合意形成力の涵養 — 裁判員制度への理解の深化を目指した合意形成ゲームの実践 —

川畑 弥生^{*1}

Fostering Consensus-Building Abilities in the Social Studies Curriculum of National Institute of Technology (KOSEN) — A Consensus-Building Game to Deepen Student Understanding of the Saiban-in System —

Yayoi Kawabata

To advance citizenship education in National Institute of Technology (KOSEN), this study reports the results of a game-format class activity aimed at improving the consensus-building abilities of KOSEN students and their understanding of the importance of consensus building in the Saiban-in (“lay judges”) system. The third-year students and the fifth-year students of our program engaged in a consensus-building game in the Public Studies III class (third-year) and Jurisprudence class (fifth-year) in preparation of the learning unit on the Saiban-in system. The students were to experientially learn the importance of consensus building through this game. The questionnaire results clarified that the game did manage to promote the students’ understanding about citizenship responsibilities.

Keywords : Mock trial, Citizenship education, Saiban-in(“lay judges”) system, Law-related education, Consensus building game

1. はじめに

選挙権年齢や成人年齢の引き下げに伴い、16歳から20歳相当の学生を対象とする高等専門学校（以下、「高専」とする）における主権者教育の重要性がこれまで以上に高まっている。また、2002年から日本主導で提唱されたESD(持続可能な開発のための教育)や2015年に国連において採択されたSDGs(持続可能な開発目標)といった国際情勢の流れを受けて、学習における基礎知識の習得のみならず主体的に社会形成に関わる能力や資質の育成が求められるようになった。これら能力や資質の育成については、高等学校指導要領(平成30年度告示)の公民編においても指摘されている。

また高専においても高専版モデルコアカリキュラム^①の中で、社会の形成に参画する能力を養うことが求められている。主権者教育が重要視される中で、高等教育機関における社会科学科目の授業を通して、学生に求められる能力をいかに養成していくかが問われている。これらの能力につい

ては、授業の中で学生や生徒が各能力を使うことを前提とした授業計画の設計や実践報告が多くなされている。一方でその能力自体が重要であるという気づきを学生に与え、その体験を通して模擬裁判員裁判等の参加型授業を体験するような授業実践報告はほとんどされていない。

そこで本稿では、高専の学生への主権者教育の高度化を目的として、裁判員制度における合意形成の重要性の理解を深めるための授業案の提起とその実践報告を行う。学生は、「裁判員制度」を学習する授業の前段階としてゲーム形式の演習(合意形成ゲーム)を通して、体験的に合意形成の重要性を理解する。話し合いがうまく行われたグループは、個人で考えるよりグループの方が最適解に近い答えが導かれることを学生間で共有し、その後、学生は模擬裁判員裁判を体験する。話し合いの場において、個人がグループに対して主体的に発言し、根拠を持って伝えることの重要性や意義を理解した上で模擬裁判員裁判に取り組むことで、グループでの質の高い合意形成を体験することができると考える。最後に、これらの授業実践報告とアンケート結果を示し、本

*一般科目教室 ¹kawabata@fukui.kosen.ac.jp

稿で提案する授業計画の有効性を述べる。

2. 先行研究

模擬裁判員裁判に関する中学生に対する事例報告として、二瓶²⁾により協働的な学びを取り入れた模擬裁判員裁判の実践報告が行われている。協働的な学びを通して、主権者としての責任感の重要性を自覚するなど、生徒の多くに意識の変化が見られたことが示された。他にも、坂田³⁾によって中学社会科の授業における裁判員制度の単元開発に関する報告がされている。学習指導要領に沿った授業目標が複数設定されており、授業後の生徒のアンケート(自由記述)では、各目標に関わる能力や資質の重要性について学び、その意識を向上させた生徒が増えたことが示された。また、刑事裁判ではなく民事裁判に関わる演習型授業として、大学における取り組みが鈴木⁴⁾により報告されている。法学部の学生を対象に社会人基礎力、特に課題発見・解決能力の育成に訴訟を中心とした紛争解決に取り組むことが有用であることが述べられている。

また、本稿で扱う合意形成ゲームを用いた授業実践の先行事例としては、中学校教員や高校生を対象とした実践報告が伊藤⁵⁾によって行われている。高校生の事後アンケートの結果から、合意形成ゲームが話し合いの意義を認識させることや相手に伝わるように話し、合意を得ることの大切さを認識させることに役立つと感じている生徒が多いという結果が示された。また清水、小川⁶⁾によって、中学生を対象にした実験では、グループワークにおけるゴールの共有がグループの話し合いの洗練度を上げ、解に近づいたことが示された。

このような先行研究が報告されているなかで、学生が模擬裁判員裁判を体験し、学生の自己評価や意識の変化を調査した研究や授業計画の報告は行われていない。そこで本稿では合意形成ゲームと模擬裁判員裁判を組み合わせ、学生の意識が変化した後の行動がどのように変わるかをアンケート結果より検証し報告する。

3. 授業の手順と教材

3・1 本授業のねらい

高専における主権者教育の高度化を目指して、本授業では次の2点を実施した。1点目は、これまでに実施してきた授業内容に対する学生の自由記述内容や運用上の課題点を検証し改善した授業を実施すること。2点目は高専版モデルコアカリキュラムで重視される能力の育成や重要性についての気づきを与える授業の実践である。

(1) 前年度の授業内容の改善

著者は、福井高専の社会科担当教員としてこれまで裁判員制度に関わる授業を実践してきた。開講当初は、裁判員制度について学ぶ講義形式の授業を中心に行っていたが、演習形式の授業を実践することでより理解が深まり、一定の成果が認められた。しかしながら、演習形式の授業において学生が自らの意見を十分に言えないことや、量刑について専門家によるファシリテーションが必要であるなど授業運営における課題点も確認された⁷⁾。

そこで上記の課題点を改善した授業として、裁判員制度を学習する単元の前段階で合意形成ゲームを実施し、合意形成をはじめとする重要な能力の確認や合意形成の重要性に気づきを与えることを重視した授業を実施した。そのねらいは、下記の3つである。1つ目は、裁判員制度の合議制において重要なことは何か、2つ目は、なぜ裁判官と一般の市民が刑事裁判について協議を行い判決や量刑のプロセスに関わるのか、3つ目は、2つ目の理由を学生自らの体験を通して学ぶことにある。合意形成ゲームを模擬裁判員裁判前に体験することで、学生が情報を整理し自分の意見を裏付ける根拠を持ち、グループの中で主体的に発言することや他者の意見を聞きその内容を自分の意見と比較してより深く考察することなどが期待できると考えた。以上を踏まえて、昨年度まで実践してきた授業内容からの改善点として、模擬裁判員裁判の前段階として合意形成ゲームを実施し、専門家によるファシリテーションが必要な量刑については省略した。

(2) 分野横断的能力の育成

独立行政法人国立高等専門学校機構では、技術者が備え

るべき能力として14の分野横断的能力(汎用的技能、態度・志向性(人間力)、創造的思考力)を高専版モデルコアカリキュラムで定めている。これらのうち、本授業に関連すると思われる11の能力を特に育成する。

[本授業に特に関連する分野横断的能力]

1. コミュニケーションスキル
2. 合意形成
3. 情報収集・活用・発信力
4. 課題発見
5. 論理的思考力
6. 主体性
7. 自己管理能力
8. 責任感
9. チームワーク力
10. リーダーシップ
11. 倫理観(独自性の尊重、公共心)

これら11の能力は、高校学習指導要領においてESDやSDGsとの関連で確認される能力・態度^(注1)と親和性が高く、高専における主権者教育の一環として持続可能な社会づくりを目指すためにも重要な能力であると考えられる。

本稿で提案する授業においても上記の11の能力のうち合意形成、コミュニケーションスキル、論理的思考力については、合意形成ゲームや模擬裁判員裁判を通して育成可能であると考えている。以下にその授業内容について示す。

3・2 授業対象者と対象科目

本授業では、高専3年生開講科目の「公共社会Ⅲ」と高専5年生開講科目の「法学」において実施した。対象クラスは、3年機械工学科(以下、「3M」とする)、3年物質工学科(以下、「3C」とする)、3年環境都市工学科(以下、「3B」とする)、5年電気電子工学科(以下、「5E」とする)、5年電子情報工学科(以下、「5EI」とする)である。令和3年度における後期の授業において、表1の通り各科目2回に分けて実施した。

表1 R3年度 科目名・受講者数・実施内容等

科目名	クラス (受講者数)	学習内容	実施日
公共 社会Ⅲ	3M (41名)	合意形成ゲーム	10月11日(月)
		模擬裁判員裁判	10月25日(月)
	3C (37名)	合意形成ゲーム	10月8日(金)
		模擬裁判員裁判	10月22日(金)
	3B (40名)	合意形成ゲーム	10月13日(水)
		模擬裁判員裁判	10月20日(水)
法学	5E (35名)	合意形成ゲーム	10月8日(金)
		模擬裁判員裁判	10月22日(金)
	5EI (35名)	合意形成ゲーム	10月7日(木)
		模擬裁判員裁判	10月14日(木)

3・3 授業の流れ

本授業は、裁判員制度について学習する単位として、授業を2回に分けて実施している。詳細は表2の通りで、学生は1回目の授業で合意形成ゲームを体験し、2回目の授業では模擬裁判員裁判を体験した。

表2 授業全体の流れ

回数	時間	内容	目的	教材
1回目	20分	[裁判員制度に関する説明] 制度の目的、経緯、裁判員が選出されるまでの流れ、合議制の内容、裁判員制度全体の流れについて学ぶ	裁判員制度に関する知識の定着	スライドを使用
	15分	[ゲーム前のワークシートへの記入] ①裁判員に求められる能力(分野横断的能力のうち11の能力から学生に優先順位をつけさせる)、②優先順位の高い能力のうち上位3位に入る能力について、どのようなことをすれば身につくのかを考えさせ、記入させる	ゲーム前・模擬裁判員制度実施前の認識を確認する	ワークシートを使用
	30分	合意形成ゲームの実施 ・問題文の説明と共有 ・個人ワーク ・グループワーク	合意形成の重要性や合意形成に必要な能力を体験的に学ぶ	ワークシートとスライドを使用
	10分	ゲームの結果をクラス全体で共有	個別のグループの結果とクラス全体の結果を比較し、全体の結果や傾向を共有する	ワークシートとMicrosoft office365のFormsを使用
	15分	[ゲーム後のワークシートへの記入] 上記①、②に関する記入。ゲームを通してどのような意識の変化があったかを考えさせ記入させる。	ゲーム後の意識の変化やゲームを通して学んだことを整理させる	ワークシートを使用
2回目	10分	前回の授業の振り返り	1週間後の授業のため、前回学習した授業の内容について再確認	スライドを使用
	40分	模擬裁判員裁判の実施 ・問題文の共有 ・個人ワーク ・グループワーク	学習したことを活かして(裁判員に必要な能力などを意識して)、模擬裁判員裁判に参加	スライドとワークシートを使用
	20分	結果を全体で共有	個別のグループの結果とクラス全体の結果を比較し、全体の結果や傾向を共有する	ワークシートとMicrosoft office365のFormsを使用
	20分	[ゲーム後のワークシートへの記入] 上記①、②に関する記入。ゲーム・模擬裁判員裁判を通してどのような意識の変化があったかを考えさせ記入させる。	ゲームと模擬裁判員裁判後の意識の変化やゲームを通して学んだことを整理させる	ワークシートを使用

(1)合意形成ゲーム

合意形成ゲームは、社会心理学者の Hall⁽⁶⁾によって実施された「月で遭難したら」というゲーム(NASA ゲームとも呼ばれる)を実施した。授業で使った問題文は以下に示す通りであり、ア～カの手順に沿ってゲームを行った。

[設定]

あなたたちは宇宙飛行士で宇宙船に乗って月面に着陸しようとしています。月面には母船が待っているのですが、母船から 200 マイル(約 320 キロ)離れたところに不時着してしまいました。不時着時の衝撃で宇宙船はほとんど壊れ使用不能となりました。しかし、次の 15 アイテムは破損を免れて完全なまま残っていました。母船に無事たどりつくために、必要なものから重要度の高い順に 1 番から 15 番までの順位をつけなさい (最も優先度が高いものが 1 となります)。

[アイテム]

マッチの入った箱、宇宙食、ナイロン製ロープ(15m)、パラシュート、ソーラー発電の携帯用暖房器、45 口径ピストル(2丁)、粉ミルク(1箱)、酸素ボンベ 45kg(2本)、星座表、救命ボート、コンパス、水(19リットル)、信号用照明弾、注射器入りの救急箱、ソーラー発電式FM送受信機

[授業の手順]

- ア. 学生と問題文とアイテムの内容を共有する。
- イ. 個人で重要度が高いと考える順番にアイテムを並べ、ワークシートに記入されているアイテムの横に 1～15 の数字を振らせる。
- ウ. 個人で考えた結果の記入が終わった後、次はグループ(4～6 人程度)で話し合いを行い、個人の時と同様にグループにおける重要度の高い順にアイテムを並べ、ワークシートに記入されているアイテムの横に 1～15 の数字を振らせる。
- エ. グループの解が出揃った後、模範解答を全員で確認し、模範解答で示されるアイテムと対応する番号をワークシートに記入させる。
- オ. 学生に手元のワークシートを確認させ、個人の結果と模範解答の結果を比較した時の絶対値の誤差を記

入させ、同様にグループの結果と模範解答の結果を比較した時の絶対値の誤差を記入させる。

- カ. 個人とグループの誤差それぞれの合計値を出し、予め準備しておいた Microsoft Office365 の Forms に結果を入力させ、リアルタイムでクラス全体の結果を共有する(図 1)。

R3【公共社会Ⅲ】(後期)第2回3B 合意形成ゲーム



図 1 学生に授業中に共有した画面(3B)

(2)模擬裁判員裁判

2 回目の授業では、模擬裁判員裁判を学生が体験する。教材は従来と同じものを用いたが、本授業では裁判における事実認定のみを扱い、量刑は実施しなかった。以下に模擬裁判員裁判の流れを示す。

本授業では、『模擬裁判をやってみよう[社会科公民的分野/1 時間構成・短縮版](2012 年度)』⁽⁹⁾を用いた。本教材の概要は、架空の強盗致傷事件について確定的な証拠がない状況の中で被告人が有罪か無罪かを学生が判断するものである。冒頭手続、証拠調べ、弁論手続、評議、判決までの全ての流れを一通り体験できるように設計されているもので、これまで刑事裁判に関わったことのない学生でもイメージしやすいものとなっている。

授業は以下のア～エの手順に沿って行った。

[授業の手順]

- ア. 学生に事件の概要等について内容を共有する。
- イ. 個人で被告人が有罪かどうかを考えさせ、個人の結論とその理由をワークシートに記入させる。
- ウ. 個人で考えた結果の記入が終わった後、次はグループ(4～6 人程度)で話し合いを行い、グループの結論

とその理由をそれぞれのワークシートに記入させる。
 エ. グループの結論が出た後、グループごとに発表させ、
 Microsoft Office365 の Forms に結果を入力させ、
 リアルタイムでクラス全体の結果を共有する。

4. アンケート結果と考察

4・1 合意形成ゲームを通じた学生の認識の変化

合意形成ゲーム実施後の学生コメントから抜粋すると以下のような意見が得られた。

「NASA ゲームが面白かった。よくできる人に頼ったわけではないのに、メンバー全員が、各個人よりもチームの方が良い結果が出ていた点が面白かった。個人の力を鍛えることは大切だが、それだけではなく、チームで動く力ももっと大切にしていきたいと感じた。」

「NASA の合意形成ゲームで、一人で判断した時より、班で話し合っただけの方が模範解答との誤差が小さくなったことが印象的でした。自分では正しいと思っていた優先順位が、他の人の意見を聞いて納得したり、多数側の意見に合わせたりしたことで、より正しい判断ができたことが面白かったです。(中略)一人で考えるよりみんなで考えた方がいいアイデアが出ると思いました。」

「合意形成ゲームを通して、自分一人で行った時よりも結果が改善したことが印象に残った。特に、ゲームに参加した全員がテーマに関する十分な知識がなく、多くが推測に頼るところであったにも関わらず、そのようになったことが興味深いと思った。社会における合意形成では、賛成・反対という主張ではなく、その裏にある利害や関心を聴き、それらを満たす提案をし合うことが大切であるとされている。今回のゲームにおいては、個人の利害等はないものの、自分の意見をただ言うだけでなく、その根拠や背景を伝え、また相手のそれを聴くことで円滑に話し合いを進めることができた。」

以上のように、個人で出した答えよりグループで出した答えの方が模範解答に近いことに驚きを持ったコメントが多かった。この体験を通して、1つの答えを導き出す時にグループで話し合いをすることの重要性に気づきを得た学生が多くみられた。また、自分の考えを相手に伝える能力(コ

ミュニケーションスキル)や情報を整理し根拠や理由を明確にする能力(論理的思考力)など、合意形成に不可欠であると思われる能力についてのコメントも見られた。これらのことから、模擬裁判員裁判の前に合意形成ゲームを実施したことの効果が表れていると考える。

4・2 裁判員制度に必要な能力の変化

本授業では、高専版モデルコアカリキュラム(分野横断的能力)のうち 11 の能力が裁判員に必要な能力とどのように関連するか優先順位を問う(無関係だと思う場合は斜線を引く)設問を設けた。本設問を合意形成ゲーム実施前後と模擬裁判員裁判実施後の計 3 回で上記内容について同じ質問をした。本節では、合意形成の重要性について特に着目し、合意形成に限定した検証を行う。

クラス別の合意形成に対する順位値の平均値の推移を確認すると、表 3 に示すように 5 クラスとも合意形成の優先順位が変わり、より優先順位の高い能力として学生が認識していることが分かる。また、裁判員に求められる能力と合意形成が無関係と考えた人数も合意形成ゲーム前と模擬裁判員裁判実施後では無関係だと考える学生の人数が減った。

表 3 合意形成と裁判員に求められる能力の変化

		合意形成 ゲーム前(平均)	合意形成 ゲーム後(平均)	模擬裁判員裁判 実施後(平均)
3M (n=37)	平均値	4.281	3.735	3.555
	関係ない	6	3	1
3C (n=29)	平均値	4.58	3.6	3.064
	関係ない	2	1	0
3B (n=39)	平均値	4.278	2.667	2.41
	関係ない	3	3	0
5E (n=31)	平均値	5.241	4.592	4.062
	関係ない	5	4	1
5EI (n=30)	平均値	5.63	4.038	3.875
	関係ない	4	4	3

表 4 には、合意形成ゲームにおける個人の回答とグループの回答の優劣の差を示す。3M 以外では、グループの回答の方が優勢であり、それらのクラスにおいては、表 3 から分かるように合意形成ゲーム前後での順位平均値が約 1 ポイント上昇している。一方 3M では順位平均値の上昇が 0.5 ポイント程度になっている。これは、表 4 を見ると分かるように個人とグループの優劣さがほぼ同数となるゲーム結果となっており、この影響が表れていると考えられる。な

お、ゲームの結果によらず他のクラスの結果を共有することで合意形成の重要性について全体の傾向として気づきを与えている。

表4 各クラスのゲーム結果(個人とグループの優劣)

	個人が優	グループが優	誤差なし
3M (n=40)	42%	48%	10%
3C (n=37)	22%	73%	5%
3B (n=39)	26%	74%	0%
5E (n=34)	32%	62%	6%
5EI (n=32)	9%	78%	13%

4・3 学生の自己評価の変化

また、合意形成ゲーム後と模擬裁判員裁判実施後に学生に対して、以下3つのアンケートを行った。

Q1. グループの人は、あなたの話を聞いてくれましたか。

1. しっかりと聞いてくれた
2. ある程度は聞いてくれた
3. あまり聞いてくれなかった
4. 全く聞いてくれなかった
5. その他()

Q2. 自分の意見をはっきりと伝えることはできましたか。

1. しっかりと伝えることができた
2. ある程度は伝えることができた
3. あまり伝えることができなかった
4. 全く伝えることができなかった
5. その他()

Q3. 自分の意見について、根拠をもって伝えることはできましたか。

1. しっかりと伝えることができた
2. ある程度は伝えることができた
3. あまり伝えることができなかった
4. 全く伝えることができなかった
5. その他()

各設問における回答の平均値を示したものが表5である。

Q1、Q2、Q3いずれにおいても、「5. その他」を選んだ学生はいなかった。

まず、Q1については、ゲーム後と模擬裁判員裁判実施後と比較した場合、グループの人が自分の意見を聞いてくれたと感じた学生は若干増えたものの、平均値に大きな違いはみられなかった。5 ゲーム後と模擬裁判員裁判実施後の誤差の平均値は、0.09であった。一方で、Q2、Q3については、ゲーム後と模擬裁判員裁判実施後で違いが見られ、特にQ3ではその変化が顕著であった。Q2の誤差の平均値は0.15、Q3の誤差の平均値は0.33であった。これらの差は、ゲームを体験したことで自分の意見を伝えるときに根拠を持って伝えることの重要性に気づいた学生が増えたことによる差であると考えられる。学生の自由記述からも、それらの傾向が見取れたため、以下に示す。

「最初は自分の意見を守ることだけを考えていたがグループになってからは他人の意見を良く聞き合意形成をすることが大切だという考えに変化した。」

「リーダーシップよりもチームメンバー各々が1人1人考えることが大切だと思った。自分では気付かなかった問題点を人が見つけてくれていることが多かったので、各々が主体的に話すこと、論理的に考える課題を見つけることが大切だと感じた」

といった回答が見られ、自分の意見を論理的に持ち意見を主体的に伝えることの重要性や自分の意見に固執せず周りとの意見をすり合わせることの重要性を自覚した学生が多くみられた。学生のこのような気づきによる変化から、模擬裁判員裁判実施後に自分の意見をはっきり伝えることができた、と回答した学生が増え全体の平均値がより低い点数になったと考えられる。

表5 自己評価の変化

		自分の話を聞いてくれた	自分の意見をはっきりと伝えた	根拠を持って意見を伝えた
3M (n=37)	ゲーム実施後	1.278	1.556	1.639
	模擬裁判員実施後	1.189	1.324	1.405
3C (n=29)	ゲーム実施後	1.200	1.320	1.520
	模擬裁判員実施後	1.226	1.355	1.258
3B (n=39)	ゲーム実施後	1.143	1.286	1.679
	模擬裁判員実施後	1.051	1.077	1.128
5E (n=31)	ゲーム実施後	1.222	1.500	1.444
	模擬裁判員実施後	1.121	1.242	1.303
5EI (n=30)	ゲーム実施後	1.308	1.538	1.846
	模擬裁判員実施後	1.057	1.171	1.400

5. おわりに

本稿では、高専の社会科科目の中で合意形成ゲームと模擬裁判員裁判を組み合わせて実践し、裁判員制度における合意形成の重要性の理解を深めるための授業案の提起とその実践報告を行った。また、合意形成をはじめとする主権者教育において重要視される能力の育成を授業内で試みた。ゲームを体験することによって、グループで一つの解を導き出すというプロセスの中で、学生が個人単位またはグループとして必要な能力を自覚することができたといえる。そして、自覚した能力を模擬裁判員裁判において自らの行動を通して体験し、裁判員制度における役割や姿勢などより深い学びを得ることができた。また、模擬裁判員裁判において、自分の考えを話す時に根拠をもって相手に説明することができたと答えた学生が多数であった点を考えると、従来の授業から改善がみられたといえる。このように授業を通して学生の行動に変化が見られたという点は、本授業が効果的に機能したと考えられる。

一方、本稿で実践した授業は、3年生や5年生のクラスというグループメンバーが互いをよく知り、比較的話し合いをしやすい環境で実施できたという点も結果に影響したと考えられる。そこで主権者教育のさらなる高度化を目指し、クラス替え直後の教室での実施など、顔なじみではないメンバー構成による授業の実施との比較検討などを行っていきたいと考えている。

参考文献

- (1) 独立行政法人国立高等専門学校機構「モデルコアカリキュラム—ガイドライン—(経済・ビジネス系を除く)」平成29年4月28日, p. 4, 113-114.
- (2) 二瓶剛「社会科公民的分野における模擬裁判の実践から主権者としての資質・能力を育成する—模擬裁判を通して協働的な学びから生徒の主権者意識を養う—」『埼玉社会科教育研究』第27巻, 2021. 3, pp. 59-67.
- (3) 坂田元丈「中学校社会科学習における市民的資質育成を目指す法教育—公民的分野「裁判員制度」の単元開発—」『教育実践研究 : 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要』第14号, 2019. 12, pp. 1-10.

- (4) 鈴木宏昌「ESDと模擬裁判の活用」『東海大学総合社会科学研究』第4巻, 2021. 3, pp. 53-58.
- (5) 伊藤新一郎「学校教育活動におけるコンセンサスゲームの可能性について」『研究紀要』第26巻, 2014. 3, pp. 38-45.
- (6) 清水誠, 小川恵里佳「協働によるグループでの話し合いの効果—ゴールの共有と合意により形成される解の洗練度—」『埼玉大学紀要 教育学部』第77巻1号, 2018, pp. 1-10.
- (7) 川畑弥生, 佐藤勇一「模擬裁判員裁判を用いた福井工業高等専門学校における主権者教育の試み」『福井工業高等専門学校 研究紀要 人文・社会科学』第53号, 2019, pp. 1-17.
- (8) J. Hall, "Decisions, Decisions, Decisions," *Psychology Today*, Vol. 5, No. 1, 1971, pp. 51-54.
- (9) 最高検察庁, 法務省大臣官房司法法制部(監)「法教育授業・補助教材『模擬裁判をやってみよう』(中学校社会科公民的分野)(1時間で行う場合・短縮版)」2012.

注記

注1) ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度として「1. 批判的に考える力、2. 未来像を予測して計画を立てる力、3. 多面的・総合的に考える力、4 コミュニケーションを行う力、5. 他者と協力する力、6. つながりを尊重する態度、7. 進んで参加する態度」の7つがある。

(受付日 2021年11月15日)

(受理日 2022年 1月21日)

研究推進委員会

委員長 津田良弘 (物質工学科)
委員 田中嘉津彦 (機械工学科)
松浦徹 (電気電子工学科)
波多浩昭 (電子情報工学科)
山脇夢彦 (物質工学科)
辻野和彦 (環境都市工学科)
挽野真一 (一般科目教室)

福井工業高等専門学校 研究紀要 人文・社会科学 第55号

令和4年2月7日 発行

編集兼
発行者

福井工業高等専門学校

福井県鯖江市下司町
TEL (0778)62-1111 (代)
FAX (0778)62-2597